

日光山小談  
全

特別  
N 3  
3617  
88



錦石秋先生編輯

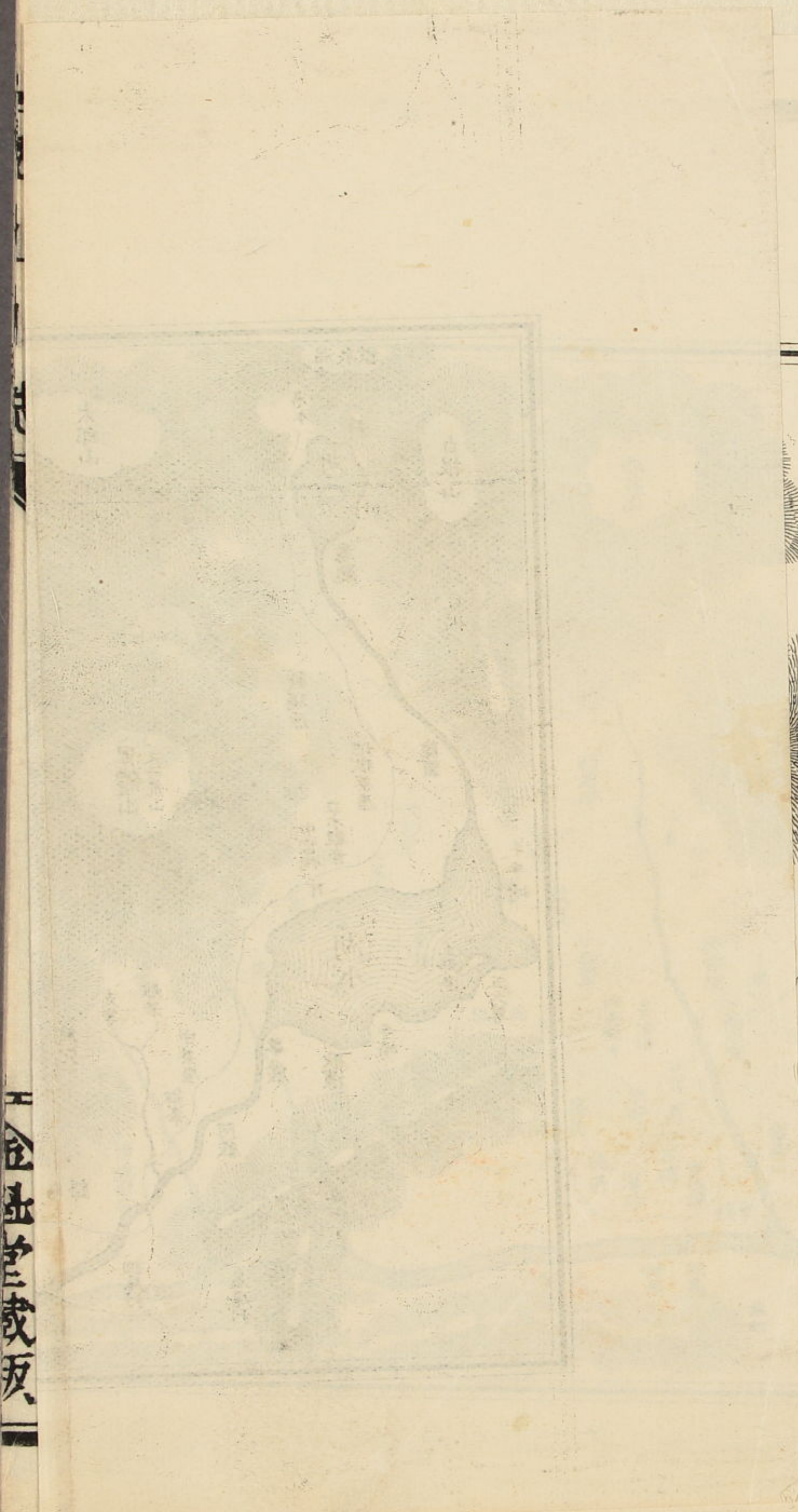
曰光山小誌

金魁堂藏版



曰光山地圖

嘉隆

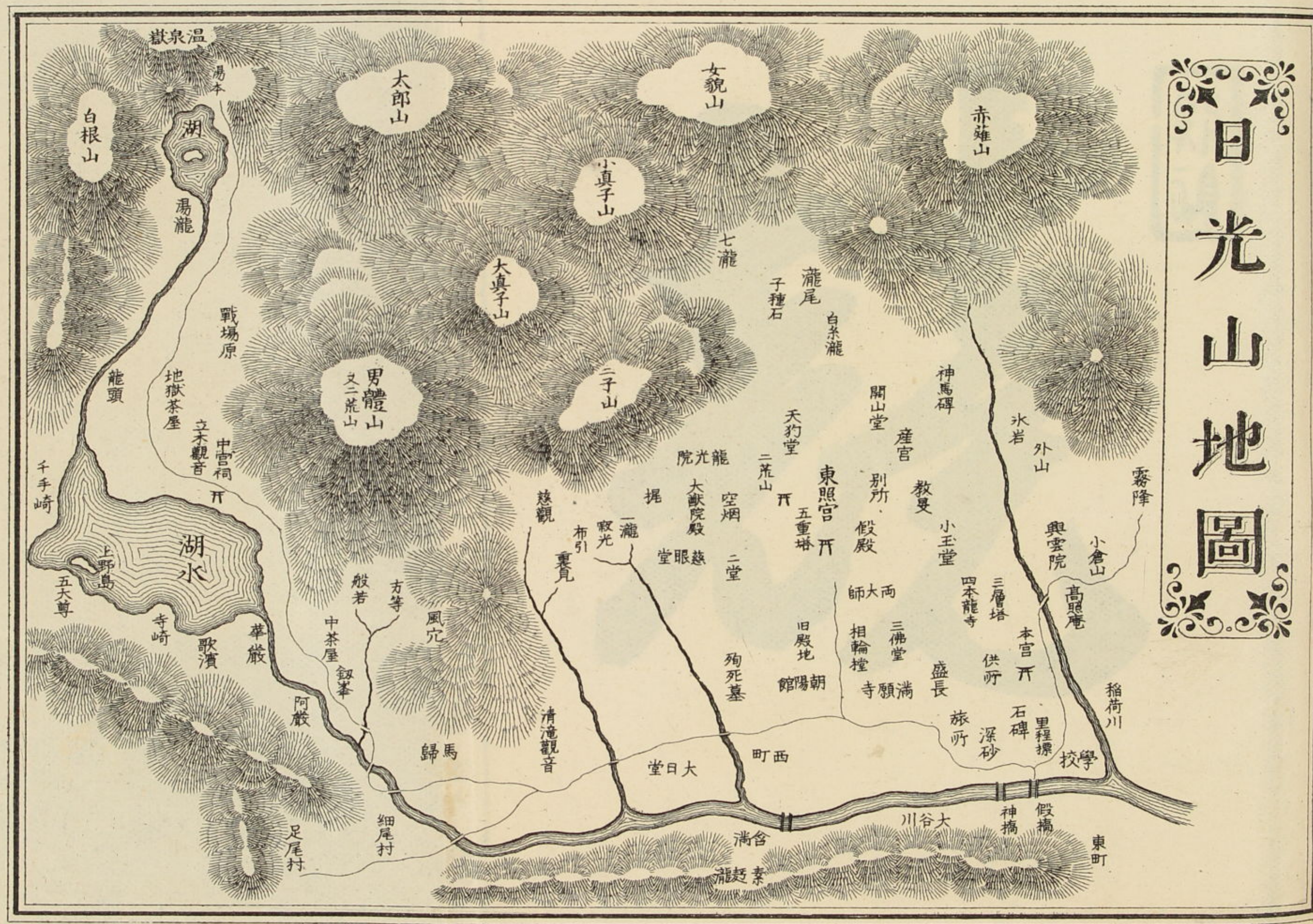


金魁堂藏版



金魁堂藏版

日光山地圖



温泉 湯本  
 白根山  
 太郎山  
 女貌山  
 赤雄山  
 小真子山  
 大真子山  
 男體山  
 三子山  
 龍尾  
 白米瀧  
 神馬碑  
 關山堂  
 産官  
 教曼  
 小玉堂  
 霧降  
 氷岩  
 外山  
 興雲院  
 小倉山  
 高懸庵  
 稻荷川  
 東町  
 川谷大  
 神橋  
 假橋  
 校學  
 里標  
 石碑  
 深砂  
 供所  
 三佛堂  
 相輪堂  
 願滿寺  
 盛長  
 旅所  
 舊地  
 朝陽館  
 大日堂  
 西大寺  
 二堂  
 空烟  
 龍光院  
 大猷院  
 慈眼堂  
 裏見  
 布引  
 一瀧  
 風穴  
 方等  
 般若  
 中茶屋  
 鉢茶  
 阿般  
 足尾村  
 細尾村  
 清滝觀音  
 歸馬  
 歌濱  
 草叢  
 寺崎  
 上野島  
 五大尊  
 千手崎  
 龍頭  
 立木觀音  
 中宮祠  
 戰場原  
 地獄茶屋  
 湯龍  
 湖  
 湖水  
 温泉

繞



日大山城圖



燭

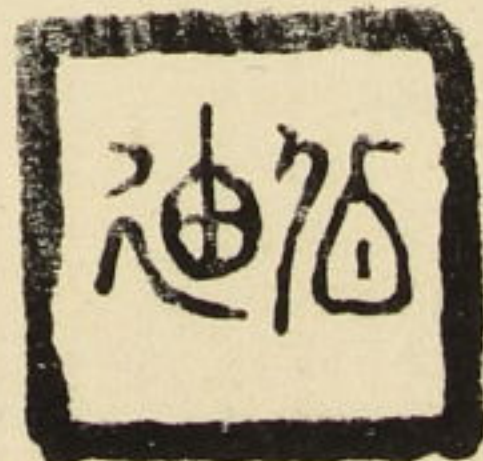
笋

晉

丁亥秋日遊晃山  
鬼平以適刻此  
書朱乞題字  
印撰四字以應

需

海南藤啓



晃山小誌

例言

一此書の編次の専ら當山參拜者の先導を旨とするが故に廢毀に屬するもの及古事雜事の如き省て録せば單に靈場勝區の概略を擧るの事

一晃山社殿の壯麗天下に冠たるの普く人の知る所たり然れども勝區の秀靈なるに至りては亦社殿の壯麗に譲らば而して筆鋒の獨り社殿に密なるもの勢ひの已むを得ざる処あり也觀官予が編次の偏倚あるを咎むること勿れ

一此書を編するに當り一二の參考書を非に雖も變革の久しき或は誤謬腐陳に出るもの多く殆ど實際に困り因て該地の耆老に議り傍ら實見を盡して編を了ら然れども予が愚才元より誤聞謬見なきを保つ能はば加之文字陋拙故に意の通ぜざる処も尠多かるべし觀官若し附會奇怪の語あらば姑く之を恕し渾沌史を以て一讀して可なり

編者識

晃山小誌

錦石秋編

總說

日光山又二荒山と称す下野西北都賀郡あり男体山又黒髪山とも云ふ其東は崎つものを  
 女貌山と唱ふ此兩山の間は大真子小真子の二峰並列せり太郎嶽は太真子の北あり赤薙  
 山は女貌山の東に連る其中間懸崖の瀑布を七瀧と称す是稻荷川の水源なり此川の北岸は  
 不動岩摺子岩氷岩等雄踞す川を隔て東は直立するを外山と云ふ此山甚だ高峻おらすと  
 雖も諸山の間は獨立する奇山あり其東は聳ゆるを小倉山と称す即ち日光八景の一勝地お  
 り霧降瀧は小倉山の東北一里余所の所ありて屈指の瀑布なり男体山の西南北は連山波  
 濤の如く起伏連接して他方は瀰れり湯嶽は男体山の西方に峙ち其東麓は温泉あり是を湯  
 元と称す中宮祠は男体山の中腹にあり旧中禪寺と唱ふるものは是なり南面の幸湖に即ち有  
 名の中禪寺湖より南岸は歌ヶ濱寺ヶ崎等の勝地相連りて風景最も羨あり華嚴瀧は湖水  
 溢れて断岸絶壁を降ること五十五間余閑東一の瀑布と称す大谷川の瀑布の下流より細



尾清龍の諸村を過て二橋を架す即ち神橋と假橋とあり是より四里許東下りて絹川に入る又大谷の南岸に鳴蟲二宮月見松立等の諸峰並列し山勢東に至りて盡く之を當山地形の概況とす其内部神社佛閣の壯麗より勝区靈場の神秀あり至りてハ次を逐て畧説を附す且次條に當山の由緒沿革等を畧記して好事諸君の一察に供す

由緒及沿革

社傳を按するに今と距ること凡二千年の昔崇神天皇の御宇皇子豊城入彦命親ら崇祀一奉る云々是叙祀の緣由あり其後平城天皇の大同三年沙門勝道威靈の感格を憑り荒尾山の清地をトし始て社殿を建立す祭祀する所の神ハ則大己貴命田心姫命味耜高彥根命是あり而して累年洪水逆逆の時方り社地の東岸毎に崩壊するに因て仁明天皇の嘉祥三年社殿を恒例山に移す是より旧趾大己貴命御子を本宮と稱し遷座の社殿貴命を新宮と唱ふ是より先承和三年下野國從五位上勳四等二荒神は正五位下を授奉る云々同八年正五位上を授け奉る云々嘉承元年從四位下を授け奉る文徳天皇の天安元年下野國は在て封戸一烟を充つ云々清和天皇の貞觀元年正三位を授く同二年勅して神主を置く云々同七年從二位を授け

奉る同十一年階を進て正二位を加ふ云々建仁三年鶴岡并二所三島日光宇都宮鷲宮野木宮以下の諸社へ神馬を奉まつらる是世上無為の御報賽云々元和三年東照宮遷座明治六年二荒山神社を國幣中社に東照宮を別格國幣社に列し自今官祭仰出さる云々之當山由緒の概畧あり

又種々の沿革を為しハ神護景雲元年勝道上人姓若田氏下大谷川を涉り始て北岸に達し野芳賀郡人翌年跋渉を企つし山嶮に雪深くして登ること能はず後十六年を經延暦元年三月辛卯して山頂に達するを得たり是より先四本龍寺及び本宮中禪寺等を創立す嵯峨天皇の弘仁元年勅して當山に満願寺の號を賜ふ八年上人の徒弟教旻和尚始て座主の職を拜す是を當山座主の第一世とす十一年空海和尚登山して教旻道珍の諸師と議り瀧尾權現の社殿を建立し尋て寂光及び清瀧權現を勸請す又中禪寺の東北に風穴あり春秋兩度必ず國中を吹荒しよとり二荒と唱へしを此時辟除結界して日光と改めし等のことあり嘉祥元年四月圓仁和尚登山して三佛常行法華の三堂を建立す初め一山の衆徒真言を奉せし圓仁和尚登山以後終に天台を奉することくハあれり座主第四世昌禪和尚社殿を法華常行二堂の後に移

是より旧社を本宮と稱し新社を新宮と唱ふ仁治元年座主第二十二世辨覚和尚一寺を建  
 立す勅して寺號を光明院と賜ふ後應永二十七年故ありて廢絶し歸せり元和三年四月東照  
 宮遷座ありてより以來一山尽く壯觀を極め廢毀し屬せし旧社も追々修理を加へ美觀を増  
 至る同年天海僧正召命よりて當山の住職とある是を中興の祖とす即ち座主第四十八  
 世あり五年新宮唐門及び拜殿を建築す七年僧正本坊を光明院の廢地し新築す寛永三年  
 本坊火災の爲め灰燼とある故に僧正又座禪院の旧跡を移る四年徳川家光公の時命を以  
 て別殿を本坊の跡地に營む十一年座禪院の隣房を撤して前の別殿を移し本坊を現今の地  
 に再築せり十三年三月朝鮮國より花瓶香炉及び燭臺等を献納す二十年又輪轉燈及び洪  
 鐘を献す此年相輪堂を興院は建つ後処々移す正保四年四月勅使來りて東照宮幣帛を  
 供す是より先不時に供幣の事あり一は此年より以來年々四月幣帛を供するを恒例とす是  
 を例幣使と云ふ慶安元年酒井忠勝五重塔を献す四年四月徳川家光公薨す遺命より當山  
 に葬る是を大猷院殿と稱す今の靈屋と唱ふるものは是あり承應三年一品守澄親王座主とあ  
 る即ち第五十一世あり始めて輪王寺殿と稱して日光東叡西山を司掌せらるる是より代々親

王家相承して座主の職を継ぐ事といふなり明暦元年朝鮮國より金燈炉二基及び樂器を大  
 猷院殿の廟前に献す明治元年第六十二世の座主公現親王適々東叡山に在り兵馬争鬪を遭  
 遇して會津に走る茲に於て座主の職絶たり此年神佛分離令出ると及んで従前僧形を以て  
 神祇に奉仕するものハ皆復飾せしめらるるに至る當山も亦今を奉りて日光権現を二荒山  
 神社と唱へ東照宮と純然たる神社に歸せり明治六年三月勅して二荒山神社を國幣中社に  
 東照宮を別格官幣社に列せられ皆官司を置て司掌せしむ又一山の寺坊を満願寺に併せて  
 一大寺院とあり當山諸堂の佛は屬するものを總掌せしめらるる近年又廢跡を継ぎて諸寺  
 を再興すと雖も従前二十六院八十坊の盛あるに比すれば寥々として禾黍の歎なき能は  
 ず然れども二荒東照の兩社に至りては更に壯觀を損することなく靈屋の如きも亦主掌す  
 るもの有りて是山の勝地と共に万世に存すべし況や聖上東巡の際辱くも鳳輦を枉させら  
 れ二荒東照兩社并に靈屋に進饌料を供賜せらるる實に當山の盛栄を輝すは足る且近來有志  
 者協力して保是會を興し全國に募金して當山保存の道を謀る其額已に十三万余圓に及べ  
 りと是唯一山の洪福のよからず天下の至幸あり

日光入口

松原町 石屋町 御幸町 松原町ハ日光入口の町あり古昔ハ此辺總て松原ありを以て松原

町と名つけしと云ふ傳へ聞く今悉く町並を成せるハ寛永以後のことありといへり御幸町

ハ元と新町と稱し山内中山の地あり石屋松原の兩町ハ山内又ハ山外処々ハ散布せる人

家あり一ハ寛永十七年故ありて新町を鉢石町の下に移し其地を四ヶの寺院ハ賜ひ山の内

外ハ散在人家を稲荷町及び松原町等に移さる當時此三町を新町との唱へしと云ふ

龍藏寺 石屋町の北側ハあり瑞雲山と号す寺内ハ觀音堂あり當國三十三所の一として大士

の尊像ハ慈覺大師の作あり又惠心僧都の作ありとて辨文天を安置す此寺ハ古昔昌山重忠

の季子重慶阿闍梨の草庵を結び一旧跡あり重慶不慮ハ誅せられ久しく廢絶せるを當山

の座主再興せりと云ふ 神主山 石屋町の南ハ當り山頂まで凡そ一里頂上平垣ある処十間許此辺都て童山より東

南十里を遠望すべし 稻荷町 一名を出町と云ふ御幸町と下鉢石町との裏手ハゆる市街あり旧とハ本宮社地の東

方ハ町並人家ありて鎮守稻荷の社を祠れるを以て稻荷町と唱へ川の名も稻荷川と稱す今

猶本宮の東方ある谷川と云ふ此川の水源ハ女貌山の七瀧より落ち來りて水勢常々山石を

穿つ寛文年中因らす水源ハ山崩れて水路を塞ぎ為ハ溪水湛へて池沼の如く程あく土塊を

押流して洪水遽ハ漲り來り沿岸の人家ハ残らず流失して溺死人も多ありといへり其

後町家を此所へ移せるを以て出町とも唱へりとぞ火の番屋敷も亦流失の後此ハ移せりと

云ふ 下鉢石町 中鉢石町 上鉢石町 晃山の方を上として上中下の三町ハ分ち長さ七町許維新

前ハ此三町にて傳馬駅次を移めりと上鉢石町の兩側ハ當處の名産指物塗物其他の諸品

を彌爾ハ商店軒を連ねて住す又中鉢石町の裏ハ鉢石似とる大石あるを以て町ハ名つけりと

云ふ鉢石の炊烟ハ日光八景の一あり 觀音寺 鉢石山と号す中鉢石町南ハ山麓より境内觀音堂の本尊ハ弘法大師の作ありと云

ふ 警察令署 上鉢石町を出ハおれ四方開けたる處の左りの山際より維新前迄ハ下乗の石柱

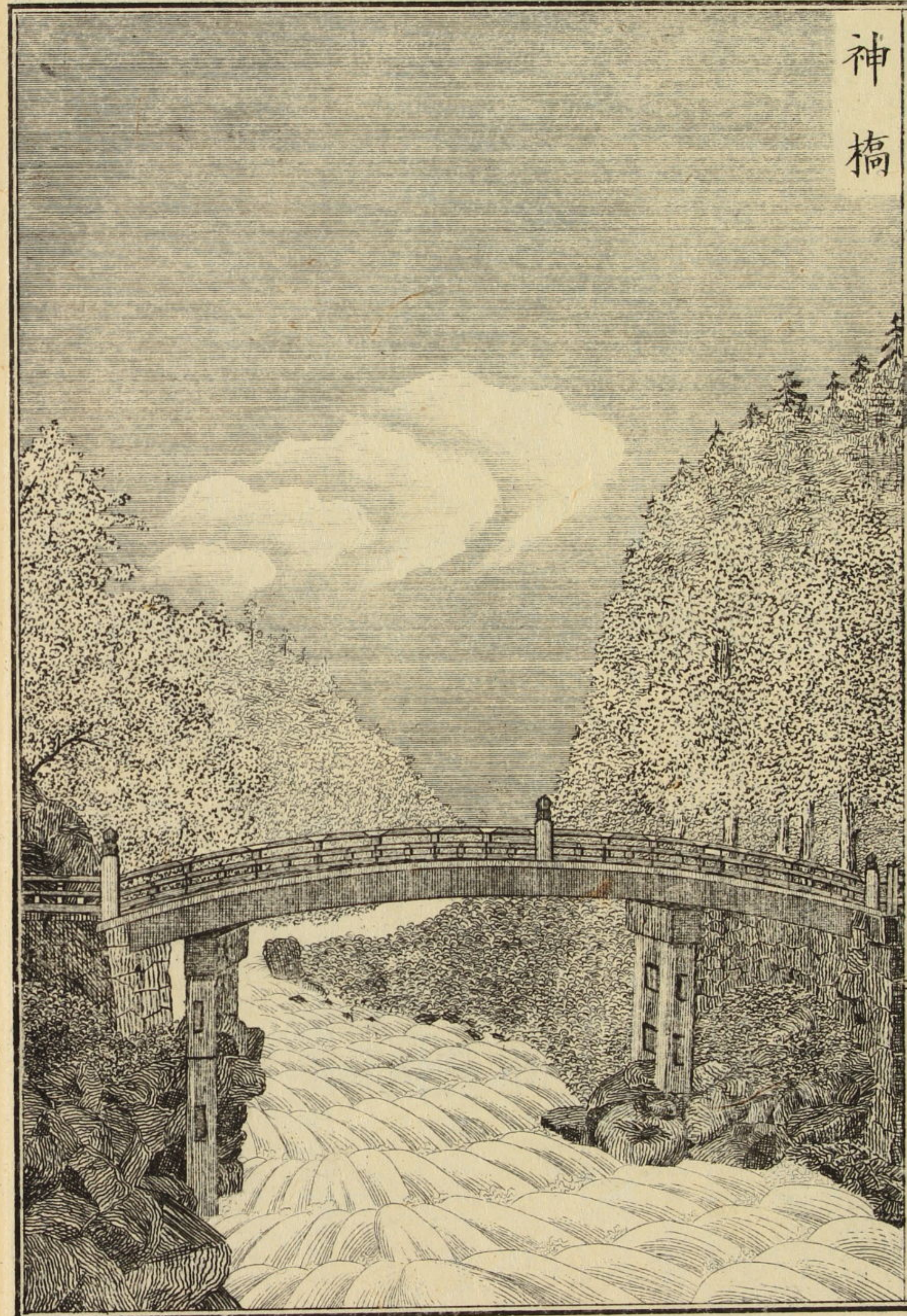
四

念出堂或反

七

志

神橋



何りしを以て土俗今に至るまで此処を下馬と唱ふ前面ハ即ち大谷川より二橋を架せり  
 星宮 下馬の南の山麓に何りし社と雖も日光縉素の社頭あり初め開山上人幼名を藤系丸と  
 稱す七歳の時夢に明星天子忽然と現れ親しく告て曰く二荒山の神代より三神垂迹の靈  
 地あり汝速に大心を發し彼山川を跋渉し勝地を草創して永く群生を濟度すへ云々藤  
 系奇異の思ひもあり是より發心常々怠らず遂に二十七才の春薙髮授戒して當山開基の功業を成せ  
 上人曾て徒弟を生きて曰く我此靈地を闢き精舎を建て世の崇信を得るものハ單に明星天子  
 の神勅と深砂大王の擁護によれり汝等及木代我耳孫たるもの常は此兩神を尊崇して必  
 す神恩を忘失すること勿れと因て神恩報謝のため一社を建立し明星天子を勧請して星の  
 宮と崇めりとぞ  
 神橋 古へ山菅橋と稱す神護景雲元年勝道上人跋渉の砌此処へ来りしに兩岸高く聳え激  
 流盤渦して濟ること能はざりしを憫然として巖上より跪き丹精を凝らし神佛に祈請する  
 こと數刻須臾髪鬚として深沙大三北岸に現れ手を持てる青赤の兩蛇を河上より向て放  
 し玉ふと見へしが忽然として紅霞の浮ぶ如く兩岸に一條の長橋を架せり上人深く冥助

を感喜すと虽も凡人未だ蛇橋を渡ること能はず暫く躊躇するに奇哉橋上は数根の山菅を生し恰も山間一路を開きたるは異ならず此に於て上人ます感歎し遂に徒弟と共に長橋を渡りて北岸に達することを得たり後ろを顧みれば大王蛇橋と共に消失其処を知らず是より此橋を稱して山菅の蛇橋と唱へけりとある後上人徒弟と謀り小橋を架して僅に往來を通せりと大同年間朝廷祈願應報の爲め日光権現の宮殿を改造せらるゝ及び富國の國司橋利遠當山造営の勅を稟王より山下に住する神司よりて工匠を遣り山菅太夫といふ者より令一太橋を架せしより諸人渡り易きことを得たり尔來十六年毎に新架の令を受け太夫の子孫代々其業に従事す太夫通稱長兵衛と号する故に里俗橋楯長兵衛と異名とり利遠勅を奉りて板橋を架せしより年を経ること八百余年東照宮遷座の後寛永六年に修繕を加へ十三年に之を新造せらる其結構は長さ十四間幅三間四尺左右前後の欄干より橋板に至るまで總朱塗より擬宝珠及び手摺の金物の減金を施し只板裏桁等黒塗あり兩岸の柱趾の大石を削りて之を支ふ實は万世不易の石柱あり其時の造構極めて壯麗あることより別一假橋を架りて諸人を通せしむ後橋の兩端に欄楯を設けて常は金鎖

將軍家の登山及び毎歳二月二十三日冬峰行者の水取と三月二日出峰の外に總て四民の通行と停止せしめらる東照宮二十一回忌に櫻家門跡其他月卿雲客下向ありとき三條実條卿の歌よ

山菅のりけて危き古橋をるを柱は渡るは代りも

假橋 神橋より十四間許東に架す橋柱を用ひす兩岸より木杖を組出して構成す長さ十三間幅三間牛馬共に通行して陥没するの患あり

大谷川 水源は中宮司の湖水より出て華嚴滝へ落來り大沢深谷の間を経流するを以て大谷の名有り此川冷水あれども鱒山鯀魚岩魚等の魚類を産す水源より七八里東流して細川に入る大谷の秋月の日光八景の一あり

高座石 神橋より二十間許の上流より往時此所に鼻突石讀誦石と稱する奇石有り一は貞享四年の洪水より三石共に埋て見えす其後元禄十七年の洪水後再び高座石のみ現出せりと云ふ

旧番所 假橋の左向より維新前の山内合て十一ヶ所あり一方今撤去て二三を餘すの

石碑 本宮地下の路傍より、是へ慶安元年松平正綱東照宮造営の砌り、宇都宮街道大沢村壬生街道小倉村より、神橋迄并山内十余里、処へ杉の列樹数万本寄進せる事を、勅せる碑文あり

本宮社祭神味耜 日光三社の一あり、社地へ假橋、前面右方の丘上より、本社拜殿共、銅葺赤塗あり、前大谷川の流れに臨み、東北に稻荷川は接す、老杉鬱々として、社殿を圍繞す、大同三年初め勝道上人、四本龍寺を此丘上より創立す、尋て西南の地を相りて、三社権現の祠壇を建つ、是當山社頭の矯矢あり、後明徳二年及び大永二年、永禄五年三回の火災に罹りて、本宮四本龍寺及び未社共、焼亡す、其後再建して、僅に旧跡を存す、東照宮遷座以後、寛文四年更に造営し、天和四年十二月二十日蓮華石町より失火して、當社及び其他の堂宇、圓禄に罹るもの頗る多し、是を日光山大延焼と唱ふ、翌貞享二年公命に因りて、新営す、即ち當今の社頭あり、別所 本社より石階を登り、左方より在り、社頭各所より別所を設く

四本龍寺 本宮の西北咫尺の地より、宝形枋葺素木造あり、本尊は千手観音五大尊及び勝道

上人の木像を安置す、此寺の勝道上人當山創立の旧跡あり、始め上人草庵より勤行する時、毎夜神人來り語りて曰く、此北嶺を四神峯と号す、東に青龍、南に朱雀、西に白虎、北に玄武の住む所あり、之に於て上人一字を建立して、四本龍寺と名づけし、後大同三年橋利遠公命によりて再興せしといふ

如法經堂 別所の東側より

紫雲石 本社の後より、平石より高さ三尺許

笈掛石 拜殿の左より、高さ三尺五寸余

三層塔 本社の後より、相傳ふ鎌倉將軍実朝公の建立より、始の東照宮社殿の辺より、後

今の地は、移し貞享年中の火災後再建せりと云ふ

三面大黒木像 初め傳教大師佛法擁護のため叡山に安置せるを、模造して各別處に安せりと

唯心院 東山谷の入口より、此寺は勝道上人最初草庵を結び玉へ旧跡あり、上人四本龍寺初立より、後の徒弟等此所を以て仮の道場とあり、区々の寺号等、設計せりといへり、年

を経て正保二年橋本坊を改め古衆徒の称号を復して唯心院と号し寺領百石を賜はる中興ハ毘海僧正の上足公宿師あり寺内ニ碓石礼拝と名つくる謂れあり石と号し又上人の徒弟仁朝の石塔も存あり

碓石 東山谷唯心院境内より此寺ハ勝道上人未だ四本龍寺へ移らざる前假り草庵を結ひ旧跡あり其後上人所持の碓石石下ニ埋めし碓石と名つけしと

礼拝石 是も唯心院の境内より上人草庵より一時紫雲石の方ニ當り觀音大士の出現せしを此石上ニて遙拜せられしより名つけしと

深砂王社 長坂へ登る右の山際より神橋守護神とす本地毘沙門天ハ勝道上人の手刺なりと云ふ

長坂 深砂王の社前より右へ登る坂路を云ふ東照宮へ詣るの本道より幅四間許登ること一町半より平垣の地より夫より左折すれは右方ハ本坊の牆壁より左方ニ四ヶの寺院あり此辺を中山と唱ふ又中山を過て右折すれは左方ハ御殿跡地東照宮所有地より右方ハ本坊の表門あり此中間の大道ハ即ち東照宮の正面より遙より石の華表を見る

御旅所 御旅所として別ニ宮殿の設けらるる山王の社あり本社ハ五間ニ三間拜殿ハ三間半四方銅骨物朱塗御供所の枋骨素木造より毎年祭典の節ハ三興の神樂を本社へ据へて

供御の式を行ひ而して兩殿の中間石甃の上ニ於て東游の舞樂を奏す其歌舞ハ神輿陪從の伶人七人にて作せり内一人ハ神樂歌を謡へ二人ハ篳篥と高麗笛を吹き四人ハ舞ふ此

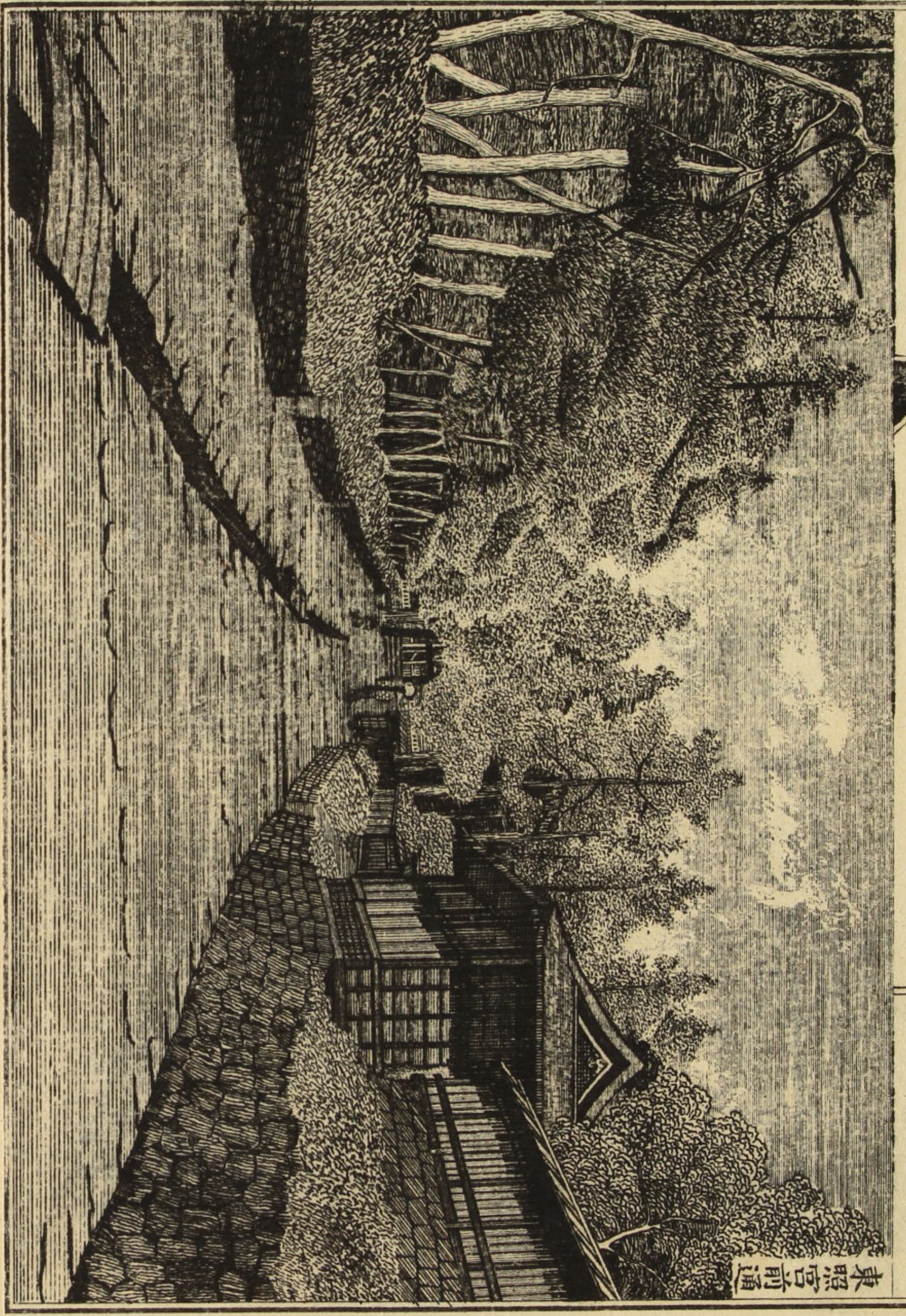
舞曲ハ東照宮祭典の始め京都の伶人來りて爰ニ奏す後久しく廢絶せしを宝永三年時の將軍ニ請て再興せりといふ當時其事を石に勒して後世ニ傳ふ今猶社殿の傍ニ建てる東游の

石碑と云ふの是あり

盛長石塔 長坂の上下角淨土院の境内より平石より正面ニ六字名号を誌し右方ニ俗名安達氏左方ニ藤九郎盛長と記せり氏ハ源頼朝卿創業の臣より信濃守に任せらる公の

薨するに及て雜髪して蓮西と号し翠軍鏞倉甘繩の私弟に歿せし人あり此所ニ石塔の何れハ甚だ怪むべき事あれとも何れ原由の何ることあらん

御殿跡地 中山通りを過き東照宮へ向ふ大道の左ある一境地を云ふ旧座禪院の境内あり初め御殿の創立ありし今の本坊の地より座禪院廢跡後寛永十八年本坊を今の地



再建し御殿を此廢跡に轉營して將軍登山の駐在所とせらる享保年間故より廢撤せら

れ尔後普請會所等使用せりと云ふ

本坊 即ち満願寺として御殿地と相對す慶長十八年天海僧正名命より當山に住して中興  
 の祖とあり元和三年東照宮遷座のとき迄ハ僧正も座禪院の旧院に住せり七年本坊を光明  
 院の旧跡に再建し後寛永十八年復今の地に轉營せり光明院ハ昔より本院あるの故に移轉  
 の後とも明曆以前迄ハ旧号を用て光明院と稱せし由一品守澄親王御愛職後明曆元年十一月  
 後水尾上皇の院宣を拜して輪王寺と改めらる寛永年間本坊造立の組織ハ僧正の自圖せら  
 れ書院等の図画ハ探幽齋守信自適齋尚信等筆する処あり中ハ就き尚信の真向の雁と  
 て書卷頗る高かりしを惜むへし貞享元年の大延焼も悉く烏有に屬せり翌年再營の時客殿  
 書院等ハ東叡山の隱殿を移せるあり當時の結構壯麗人目を驚かせしは明治戊辰以後一  
 山の諸寺院を合せ當山上古の寺号を復して満願寺と稱す復明治四年五月回祿に罹り七年  
 更に再築すも雖も時世の変遷終に旧觀を復することを得ず

棧鋪 本坊の表門と相並て南より初め祭祀の節將軍家の拜覽所ハ別殿の圈内に建設す



三佛堂



り一が別殿取拂の後將軍登山られへ本坊を以て假の柳宮とあり此棧鋪を拜覽所と充てられしと

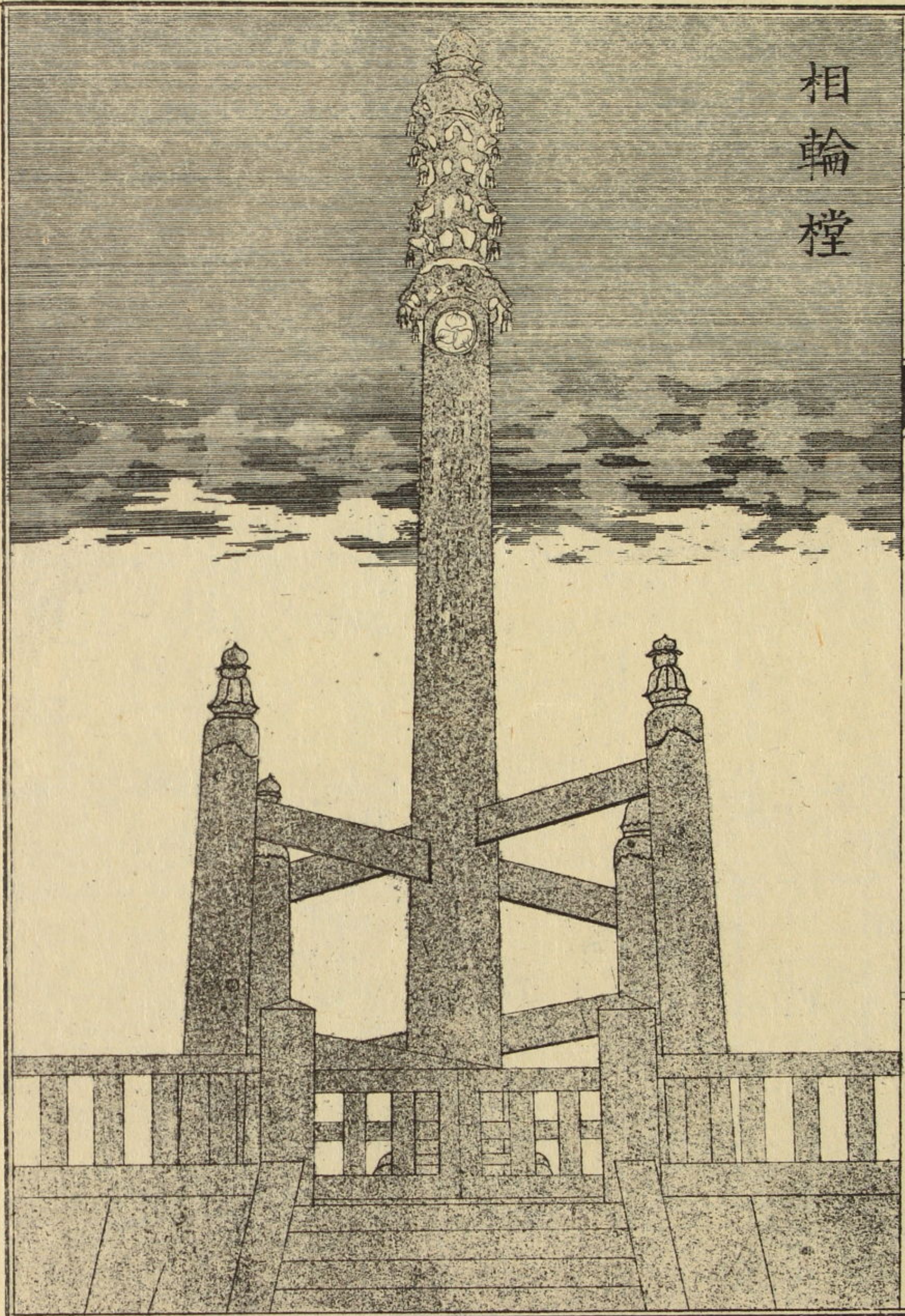
三佛堂 本坊の表門を入り左方ニ巍々として峙つものは是より往時金堂と称す當山第一の  
 大堂あり南ニ面す前面十八間横十四間銅葺總朱塗よりて金具ハ槓金あり本尊ハ千手觀  
 音馬頭觀音阿彌陀佛の三大座像を安置す此堂元ハ二荒山の鳥居内の北辺より一ハ明治  
 維新の際神佛分離の令出ると及て本坊の司掌ニ歸り後永保存のため恩賜三千金を受て此  
 地ニ轉堂す

兩大師 三佛堂の北より初め慈惠慈眼の兩大師を請りて毎月山内の寺院へ遷座有りしか  
 諸寺合併後此処へ安置せりとつ

時鐘 三佛堂の左方より鐘口直径四尺天保二年の改鑄あり覆屋ハ椽の素木よりて一隅  
 二三柱を建つ

相輪檜 三佛堂の西北咫尺の地より天海僧正叡山に比し傳教大師の銘文を摸寫りて建  
 立す處あり其構成方形の石垣を高く築き上は石籬を廻り中央ニ輪檜の銅柱を建つ其

相輪檜



高さ地の盤石より四丈四尺元口直径三尺一寸座石八角より基石の方形より上部は金の  
瓔珞二十七連と金鈴二十四ヶを裝飾す滅金金具の下は葵の金紋を附す副柱四基同く銅  
製より高さ各一丈七尺八寸皆擬宝珠を冠す此檜は始め東照宮興院の側は建てしか後新  
宮馬場の傍に移し後又此処に移せりとつゝ又此檜の左右は唐銅の燈炬二基對立す高さ各  
二丈許上部は金の金具を飾る慶安元年糸商人の献す所也

東照宮 祭神徳川家康公天文十一年十二月二十六日参州岡寄に生る永禄元年二月歳十七  
参州寺部の攻城を初陣として尔来兵馬に従事すること五十八年百折不撓終つて天下の争乱  
を鎮めて統一の功業を開かむ官三河守より累進して太政大臣に至る元和二年四月十七  
日駿河の城に於て薨す歳七十五同國宇度郡久能山に葬り安國院殿一品大相國徳運社崇  
誉道和大居士と謚す云々

御鎮座記は曰元和三年二月二十一日勅命より東照大権現と尊稱す三月九日正一位を追  
贈せらる同十五日神靈を下野日光山に遷し奉らんと寅ノ上尅大僧正天海鋤鎌を取るは大  
職冠改葬の旧例より同日靈柩久能山を發して善徳寺に至る先導へ則大僧正天海次は山門

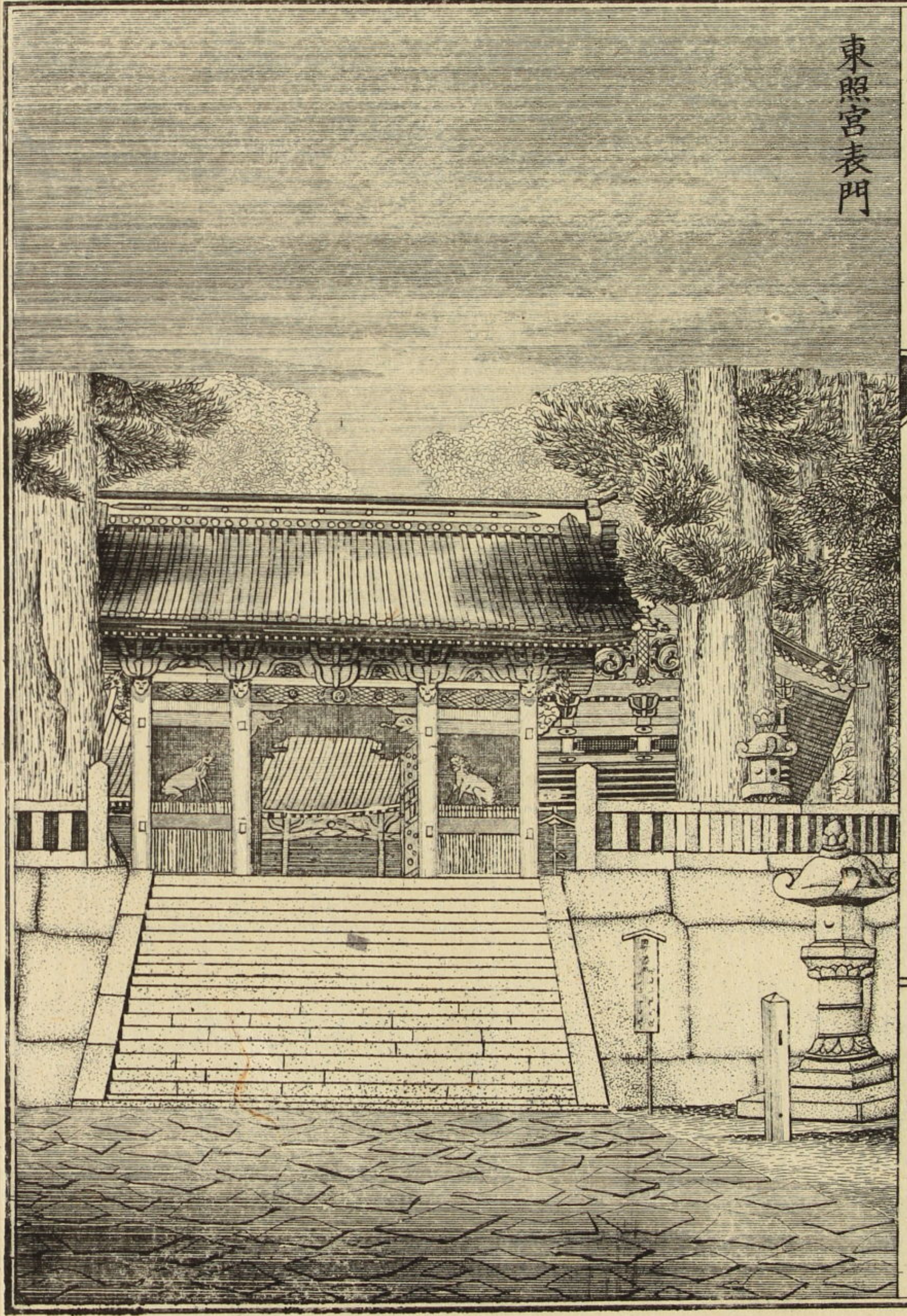
東照宮石鳥居  
五重塔



の碩学関東の知識等あり將軍家及び三家よりの名代として本多上野公正絶土井大炊頭  
 利勝松平右衛門太夫正久板倉内膳正重昌秋元但馬守奉朝成瀬隼人正正成安藤帶刀貞次  
 中山備中守信吉等鞍馬を勒して扈從せり十六日三島に至る此所留る二日二十一日武  
 州府中に至る留る五日二十七日忍城二十八日佐野二十九日鹿沼に至る此所留る四月三日  
 追留る同四日木の上越日光山座禪院に入る同八日靈樞を廟塔に收む十四日神を仮殿に移  
 奉る宣命使阿野宰相実頭卿十六日神を正殿に移奉る宣命使中御門宰相宣衡卿奉幣  
 使清閑寺宰相共房卿あり十七日本社に於て大法會を修せらる導師大僧正天海願正  
 覺院權僧正裏海證誠梶井二品最胤親王宰す云々正保二乙酉十一月三日勅して宮号を賜ふ  
 是新帝御即位大権現の神助之何るに依てあり人臣よして宮号を賜りし東照宮一社に限  
 れり明治六年六月九日別格官幣社に列せられ神威更に赫々たり

石華表 東照宮表門前より石杖ハ御影石よして高さ二丈八尺六寸五分柱石の直径三尺五  
 寸柱根ハ二尺六寸後水尾天皇の宸翰東照大権現の扁額を掲ぐ元和四年四月黒田筑前守  
 長政本國筑前子於て削鉦し遙く南海より運搬して献する処あり

東照宮表門



石燈炉四基 各高さ一丈二尺石華表内の左方より二基八元和四年四月有馬中務大輔忠頼

又東照宮表門の左右より二基八同年同月酒井譜岐守忠勝の献する処

五重塔 石華表の西より總高さ十七間三尺塔内三間四方柱ハ金襴卷外部ハ手先に至るまで

總彩色承塵の上通十二支を彫たり本尊ハ五智如来及び須弥の四天を安置せり慶安元年

酒井侍從忠勝の献する処

石垣 表門両辺の石垣其高さ一丈三尺左右滑海藻石阿房丸石と名つくる二大石あり各

大小異あれども阿房丸石の如きハ横二丈二尺高さハ一石を以て石垣の上下を貫く其臣大

驚くべし

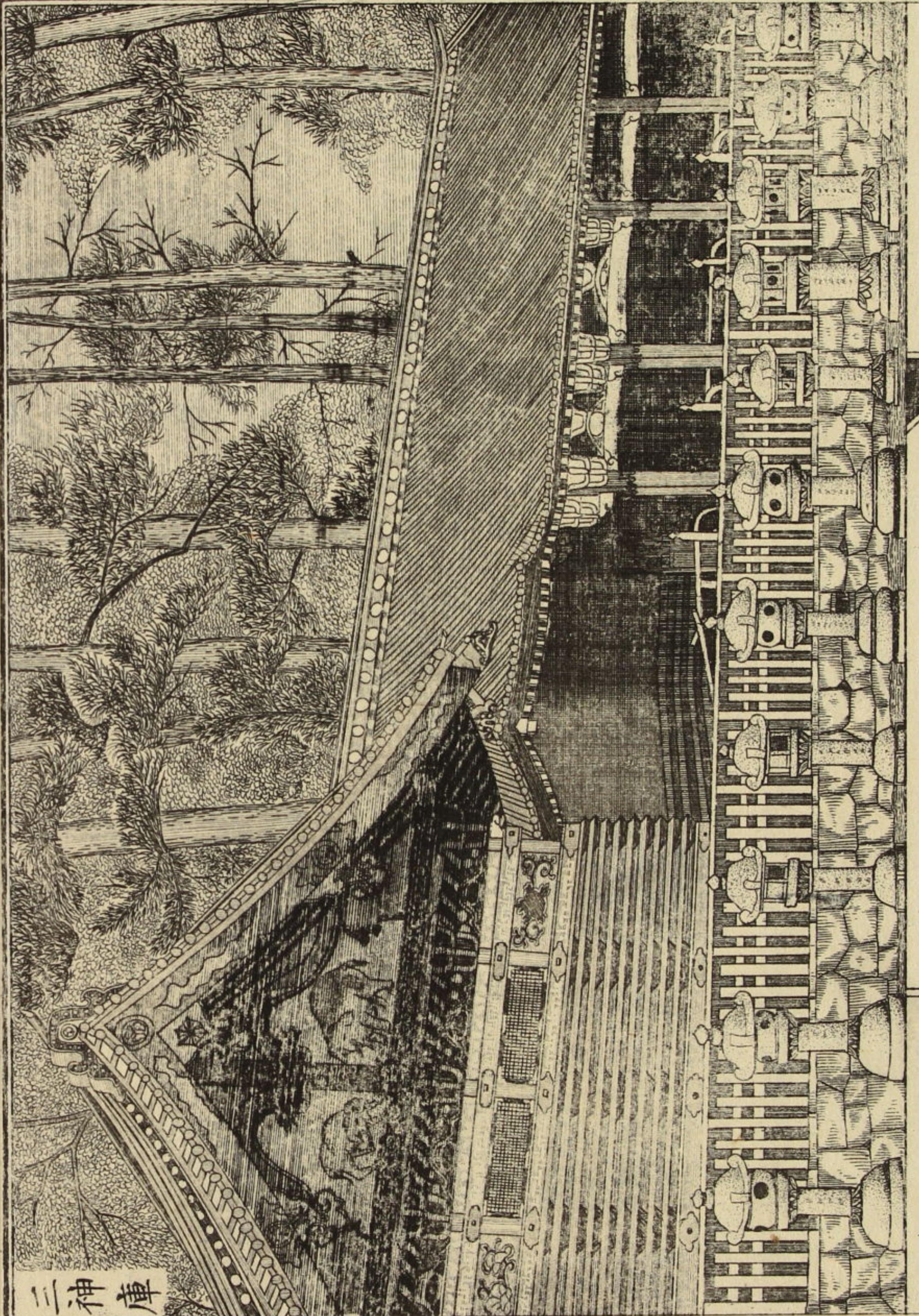
表門 石華表の正面に當れり前面四間横二間余釘草惣塗すして極彩色あり門の左右に金

の獅子を置く此処より以内ハ方形の石礎を敷き陽明門に至るまで數百歩の間を三折り左

右ハ丸の小石を敷詰め寸許の土塊を見す又表門の両辺より堀田を設け東ハ裏門に達し西

ハ新宮馬場の大門に至る

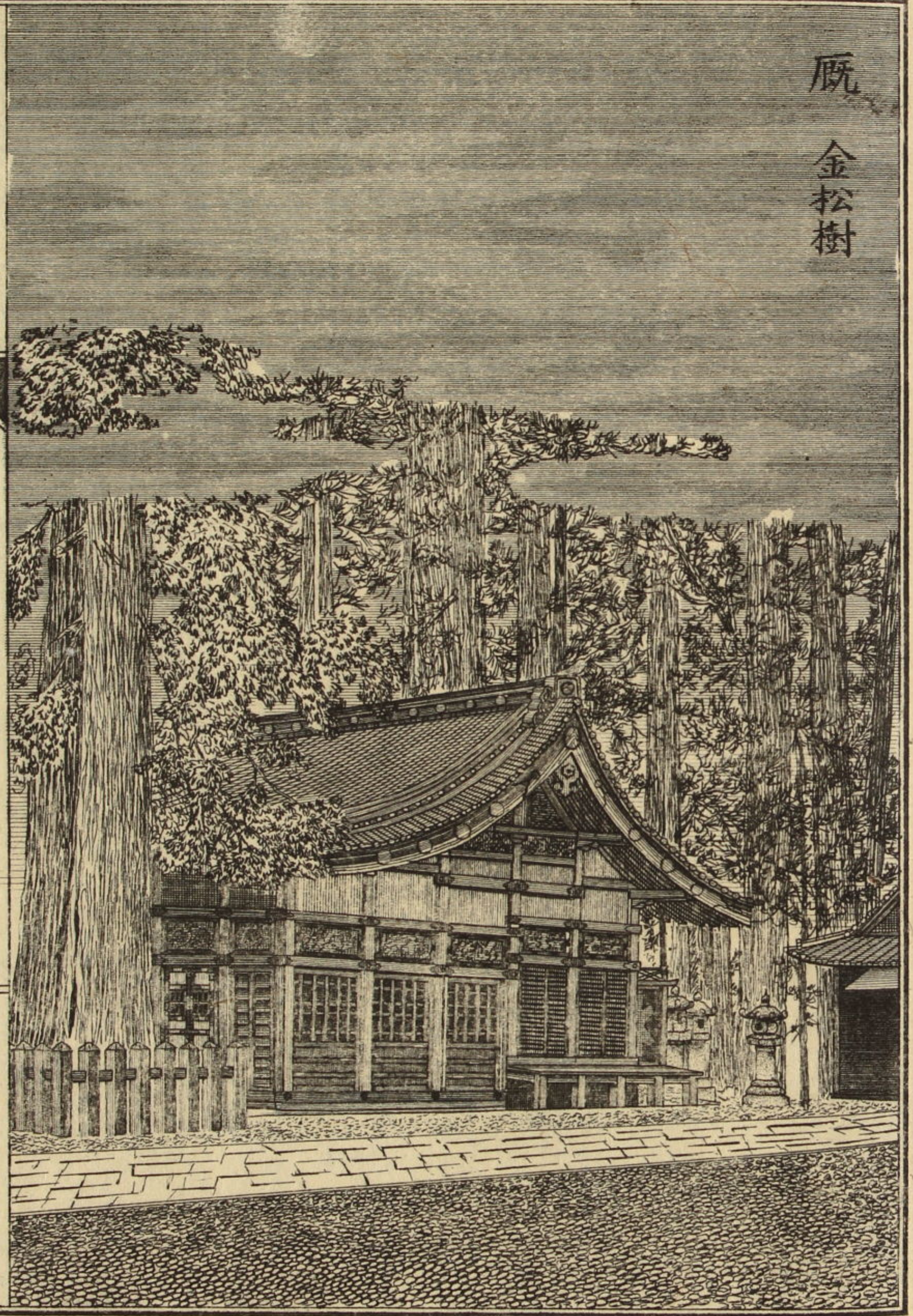
三神庫 表門を入り右方より相並ふ三庫兵の向を異す中の一庫ハ南の面一前後の二庫ハ西



金鬼堂瘧片

三神庫

厩  
金松樹



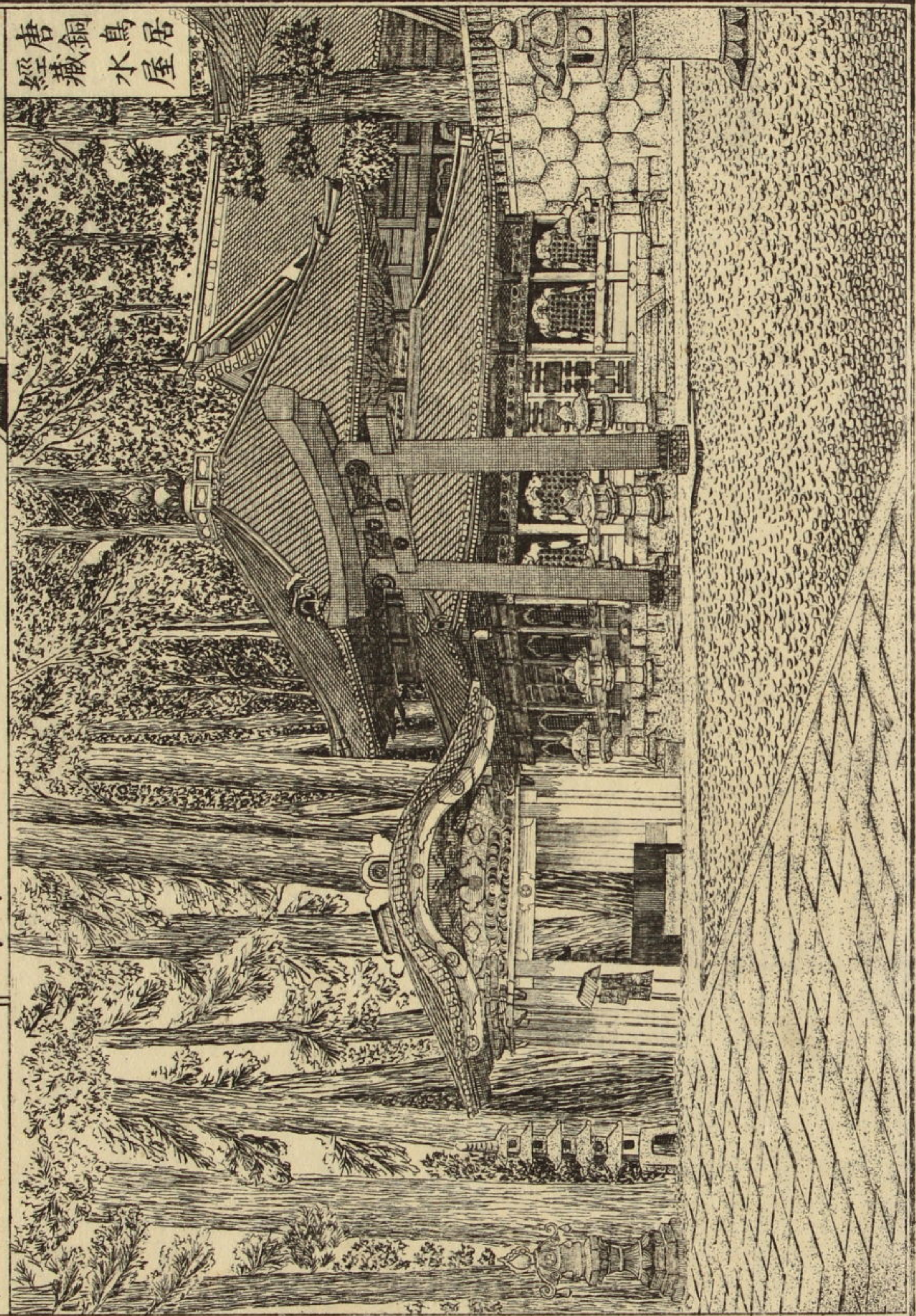
向ふ銅葺總朱塗極彩色を施す第一庫の側面承塵の上五尺許の大象二頭を刻成す恰も生るゝ如く探幽守信の素圖の彫刻ありと云ふ左も右もねべり

厩 表門内の左方より素木造り猿猴花実の彫物真に迫る總て表門内の結構ハ惣朱塗大着色おれとも素木の造構ハ此一棟に限れり  
金松樹 厩の側より実ハ本楨と称するもの周回一丈余弘法大師高野山より移せる処あり

番所 厩と相並ぶ里俗赤番所と唱ふ番官更番して社内を警衛す  
御手洗水盤 土俗御水屋と唱ふ番所の西方より水盤ハ御影石より長さ八尺五寸幅四尺

高さ三尺五寸常盤底より清水漏出して四方に溢る覆屋ハ二間半ハ二間唐破風造り破風下ハ飛龍の彫物を飾り其下ハ激浪を装ふ桁柱共御影石より一隅ハ三柱を建各地ハ金具を施して構成頗る美麗あり元和四年鍋島守の献する処あり

唐銅葺表 水盤屋の前より高さ二丈余笠木の表裏ハ金紋を附す三代將軍の献寄ありと云ふ



居鳥銅唐  
屋水藏經

輪藏 水盤屋の北方より堂の廣さ六間四面二重宝形造り四方より扉を設く堂内ハ石礎より  
 て左右より後の方一間通り楊床より畳を敷く中央の輪藏一切経を納む其前より傳大士左  
 右より普成普建の木像を安置せり里俗之を笑堂とも称せり

南蛮鉄燈炉 陽明門へ向ひ右の方石垣の下より二基對立す共より高さ八尺元和三年仙台宰相政  
 宗の献する処里俗相傳ふ此燈炉を製作するに當りて領内三年の租税を費せりと云ふ

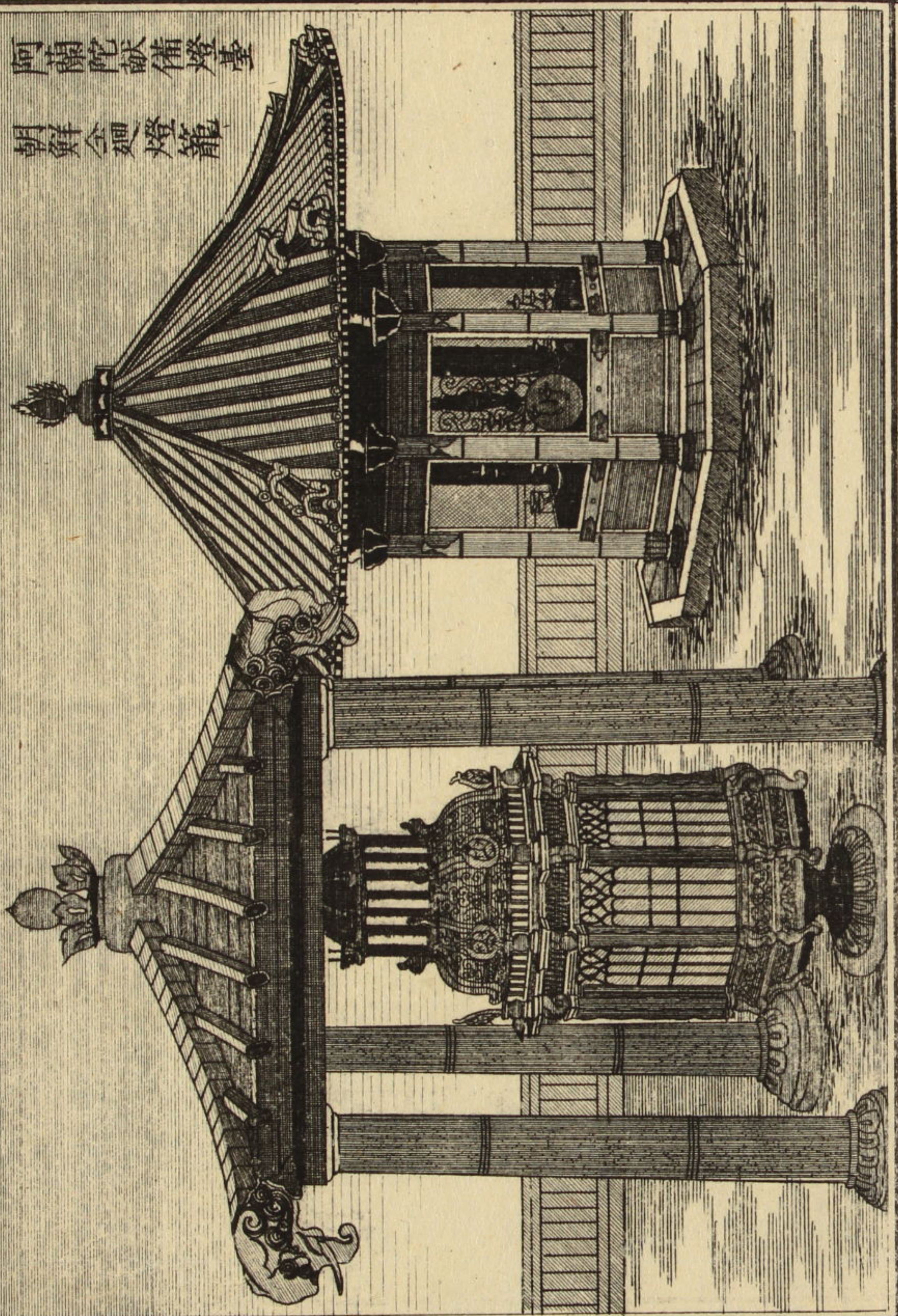
諸家献備燈炉 總數百十六基 唐銅十五基 石百一基

飛越獅子 陽明門前の石階を登りて左右の石欄内に附着す往時將軍家登山より一時此  
 名技を見て喜色ありと故より恐悦の獅子とも唱ふ此石籬内を總て中段と稱す

朝鮮國献備鐘 龍頭の下より一竅あり里俗蟲喰鐘と云ふ覆屋ハ四趾より唐銅製あり  
 朝鮮國献備燈台穗屋 穗屋ハ九角より黄銅を以て作る回轉自在あり綱ハ鉄より高さ一丈二尺

許正中より主柱を建て之より枝釘兩段を附す每段より燈釘各九個を設く覆屋ハ前より同  
 阿蘭陀献備燈台 高さ一丈許主柱より枝釘を附すること三段每段燈釘各十個

琉球献備燈台 里俗蓮燈籠と云ふ唐銅製高さ一丈二尺許主柱の上端より一釘あり其下を三



阿蘭陀献備燈臺

朝鮮國廻燈籠

段と一毎段の燈缸各十個台下ハ六の蟻足にて之を支ふ

鐘樓 朝鮮鐘の東より高さ三丈五尺許土台石際五間二四間二手先より皆龍頭を組出せり樓腹ハ銅板を以て包む金具ハ悉く減金あり

鼓樓 朝鮮穗屋の西より造構鐘樓異あらずと雖も只手先ハ方形あり即ち鐘樓と共に陽

明門の左右に對峙す

本地堂 鼓樓の西より大間造り前面十間横六間向拜ハ七間二四間鯉口を掲ぐ内柱ハ惣だ

階段ハ五級赤銅にて作す正面ハ参州峯の藥師の摸造を安置し左右ハ日月天十二神

將四天王其他諸佛の像を陪列せり内陣の天井ハ長さ八間の蟠龍を墨画す狩野安信の筆

あり

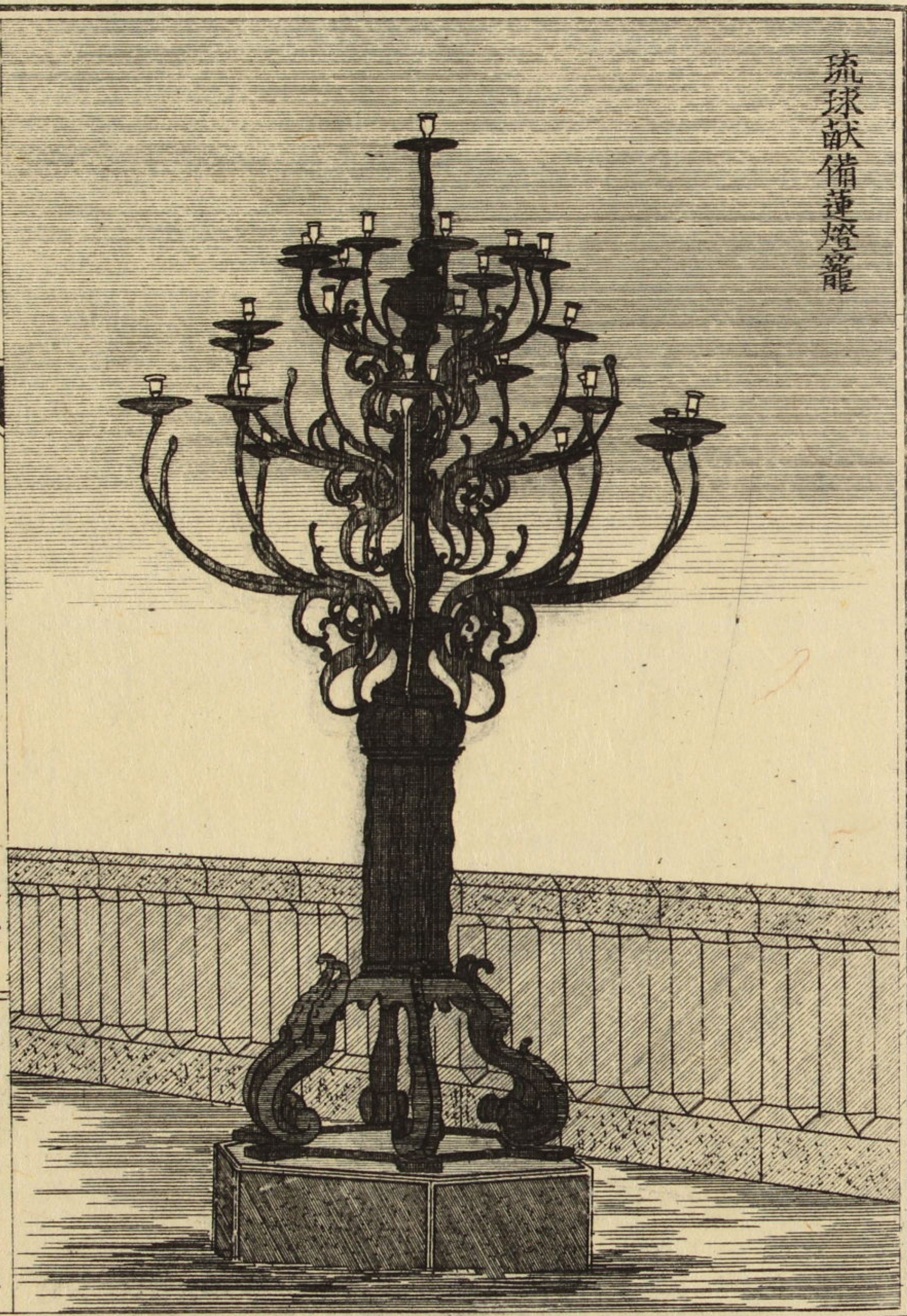
陽明門 石階を登りて中段より正面ハ高く仰ぐもの是あり里俗日暮門とも唱ふ方位南ハ面

す前面三間半側面二間余三手先造四方唐破風垂木ハ二重扇垂木より四隅の簷頭ハ金の

大銀を掲ぐ四方の破風下ハ二頭の麒麟を刻す正面の扁額ハ後陽成天皇の宸翰あり神号

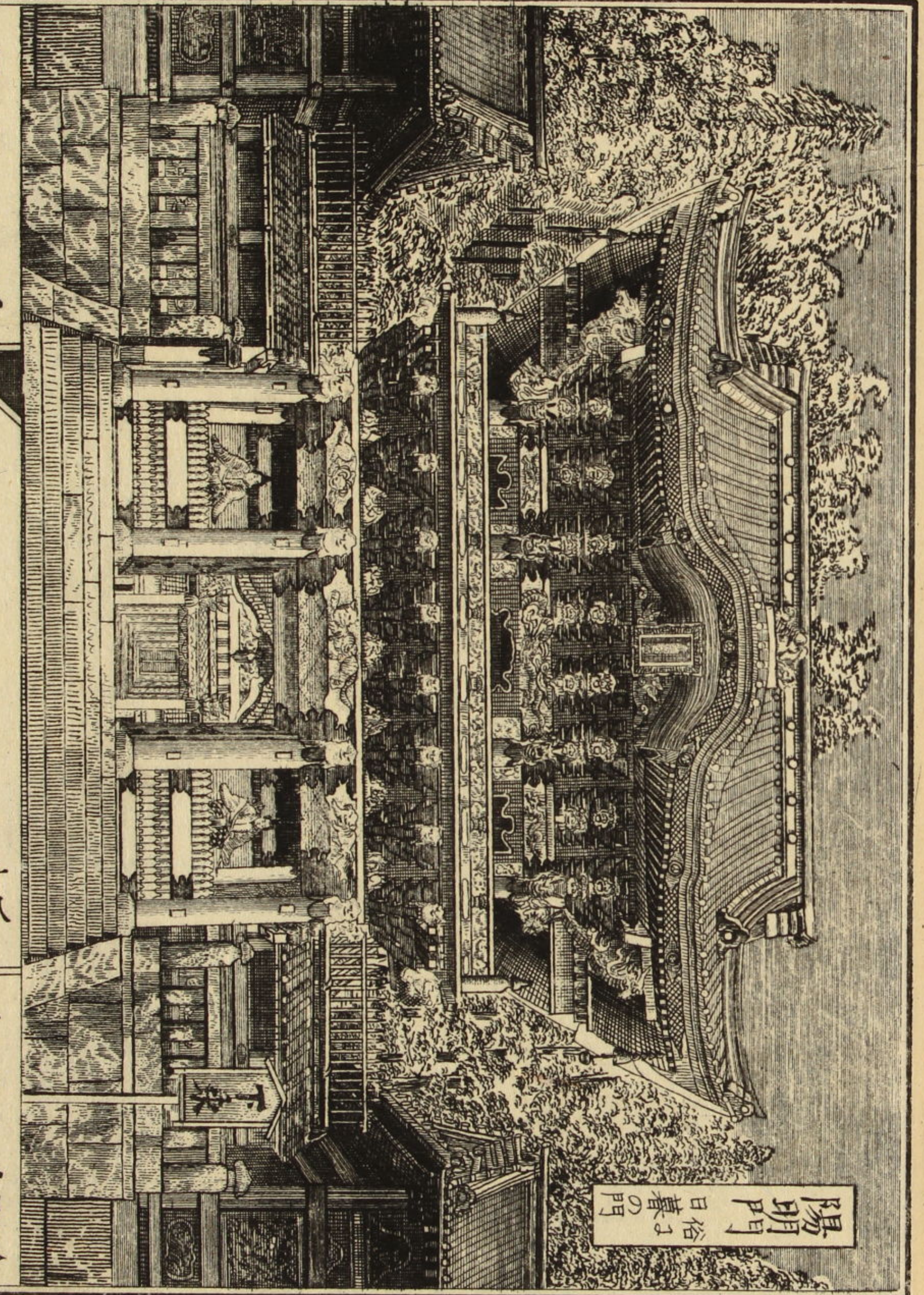
の文字ハ純金より其外ハ紺青を以て之を填む四隅の柱ハ添て金の雲龍を掲ぐ手先ハ

琉球献備蓮燈籠





数頭の金龍を組出し其下多々舛組の間々ハ桐鳳凰を彫む直下の象鼻ハ白色龍馬の彫  
 物此中央間又白龍を刻せり俗之を目貫龍と云ふ高欄の手摺ハ臘色ハ金金物を装ひ欄  
 間ハ間毎ハ唐子遊の丸彫揚俗之を唐子千人の智惠遊といふ高欄の下ハ亦三尺間毎ハ牡  
 丹ハ金獅子を彫出す其下ある舛組の間々の彫物の正面ハ三区ハ周公聴訟の図左右の四区  
 ハ琴棋書画の人物あり西側ハ高山四皓虎溪三笑ハ仙の内酢吸三聖東脇ハ遜思邈四睡福人  
 張良後面ハ琴高馬思公上利劔費張房王商鉄拐等あり其下の桁鼻ハ白獅子を彫出し其間ハ  
 ハ乱獅子を彫せり柱ハ十二本皆棒の口柱ハ一ハ白地ハ雲菱の地紋を彫り各処ハ口大の紋  
 を設けて中ハ鳥獸草花を彫刺す裏ハ左ハ一本の柱ハ地紋を倒ハ彫む土俗魔よけの柱と  
 いふ羽目ハ牡丹唐草の透彫左右の天井ハ天人を画き兩間ハ仕切り昇降の二龍を墨画せ  
 り之れ探幽齋守信が筆する処尔来修繕の際ハ虽も曾て入手せずして妙手を存せりと門の  
 左右ハ前面ハ隨人を安リ裏面ハ金獅子を置く門の袖屏の表ハ白獅子裏ハ金獅子あり此他  
 種々の彫物枚挙するに遑ならず故ハ拜覧の人殆ど還るを忘る日暮門の名称空一あらざる  
 あり傳へ言ふ此門より以内の彫物ハ守信安信の素図より彫工も亦天下の名技を撰へり



陽明門 俗に日暮の門

と云ふ

回廊 陽明門の袖屏は續き東へ二十一間北折して社務所は達す西へ十二間同く北折して永

く石垣はそて尽く此羽目の大彫物に松竹梅孔雀鳳凰水鳥等の浮彫あり

神輿舎 陽明門の西は有り前後は唐戸口を設く天井は天人を画けり

神樂殿 陽明門の東は有り拜殿は面せり

社務所 堂ト云フ 神樂殿の西北は有り西は面す左右上部外通平桁の上草花鳥の彫物あり往

時正五九月護摩修法有り一処ありといふ

唐門 陽明門の正面は當る前面一丈二尺横七尺四方唐破風造り前面破風上の屋棟は唐銅

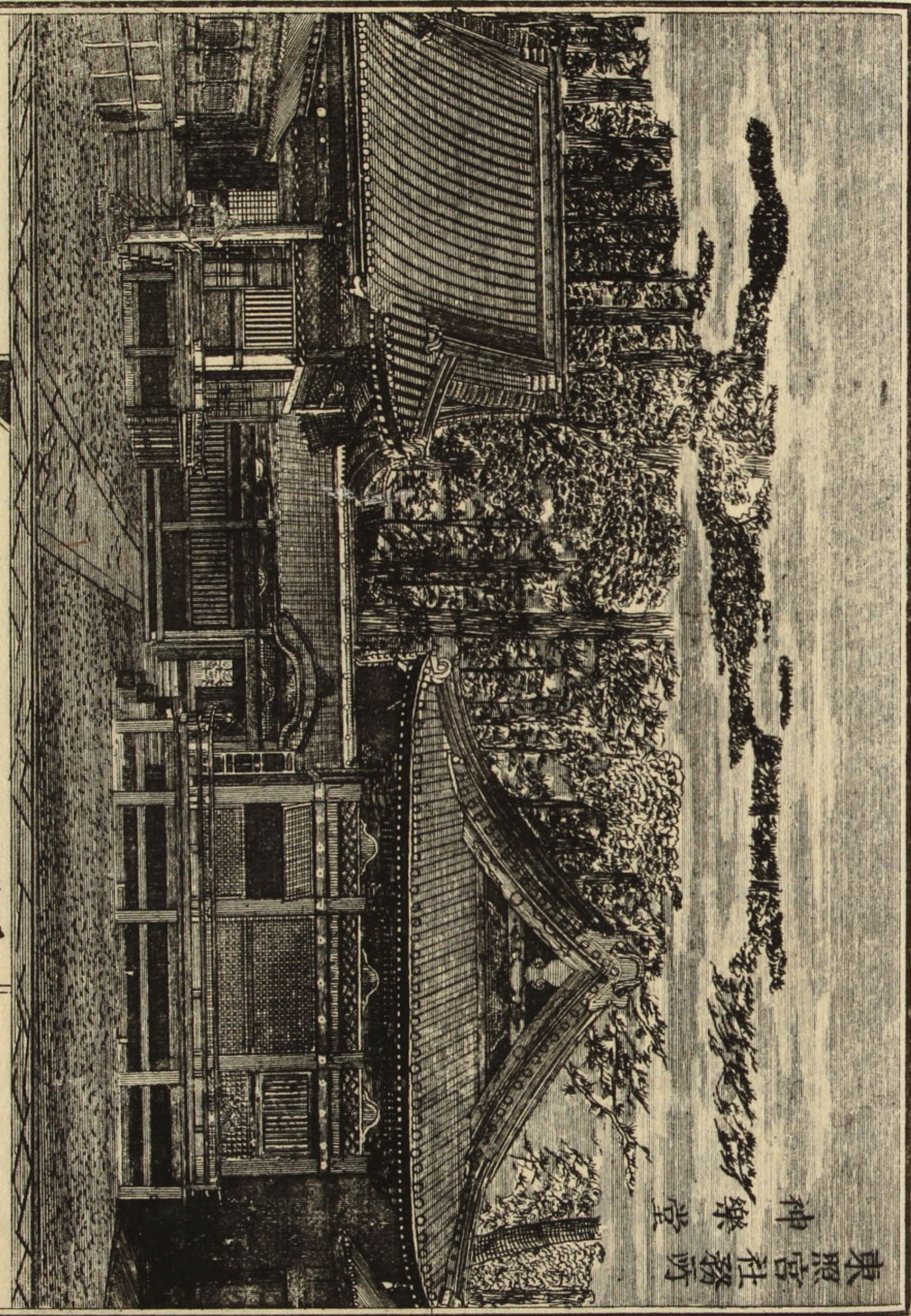
て作れる獅子は似たるものを里俗傳て恙と稱する蟲ありと云ふ大さ三尺許り四趾有り鎖

を以て繫く東西の棟上は銅製の二龍有り長さ五尺許り又前の破風下は巢父許由其下は河

骨杜若其下平桁の上あるは帝堯の百官あり後の破風下は波は免其下は竹林の七賢西脇ハ

七福人東脇ハ七仙人等を彫刺す前面の兩柱は唐木にて昇降の二龍は梅竹を添彫す皆本地

の高彫あり後面の二柱は白地は唐木の花木瓜と二行は柑入す天井は白地は天人彈琴の圖



東邊社務所

を刺し門の西扉ハ唐木にて梅菊牡丹等を彫刻せり其精妙ニ至りてハ筆紙のよく尽き処ニ  
あらさるあり

瑞籬 唐門の左右より拜殿本殿を圍繞す欄間の上あるハ山鳥下あるハ水鳥共ニ籠彫りて

極彩色あり

唐銅燈炉一基 唐門外の東方ニあり献寄の品ありと云傳ふ

拜殿 唐門以内ハ往時庶人の拜覽を許さざりしと方今許して以て尊嚴を知らしむるニ

至る亦開明の洪福あり方位正南ニ面す前面十一間二尺側面四間二尺千鳥破風及向拜あり

千鳥破風の枇杷板ハ松ニ双鶴向拜の破風下ハ雌雄二虎の彫物あり向拜の四柱ハ綸子形の

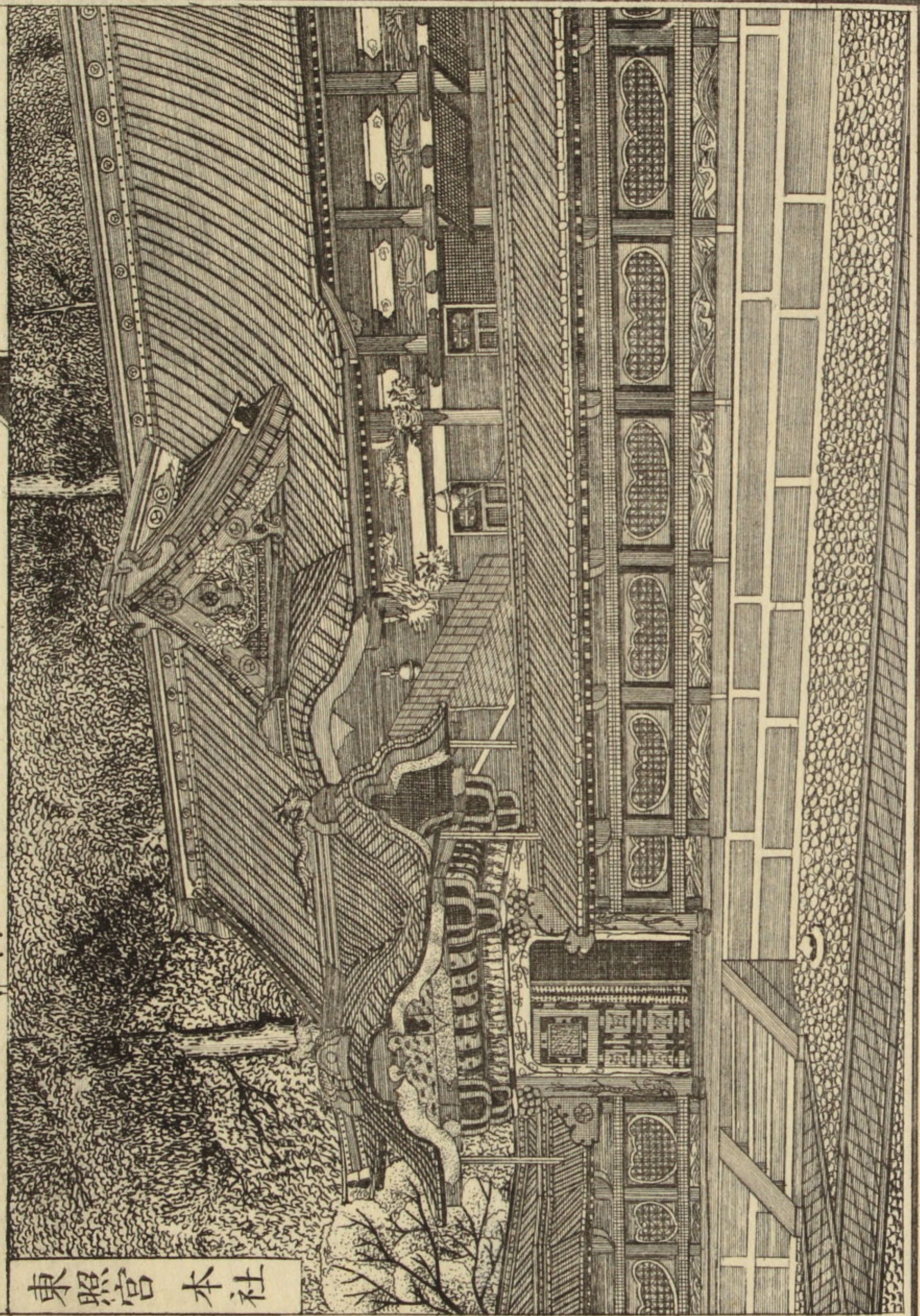
地紋を彫り処々ニ圓紋を設け其内ニ種々の禽獸花卉を彫刺す左右の虹梁上ハ白獅子象鼻

及び手挾ハ白龍の丸彫あり雲手先の下ある外組の間ハ菊水の彫物正面長押上の三区ハ花

水ニ種々の小鳥を彫り左右より兩傍ハ桐ニ鳳凰を刺せり唐戸ハ三扉四方上部唐戸の羽目

ハ牡丹唐草外の臘色ニ唐草の蒔画あり濱椽及び高欄も共ニ黒臘色あり殿階ハ五級悉く減

金板を以て張詰たり又殿内の結構ハ柱ハ総金タミ中央の天井ハ抗揚二重の格天井其内ニ



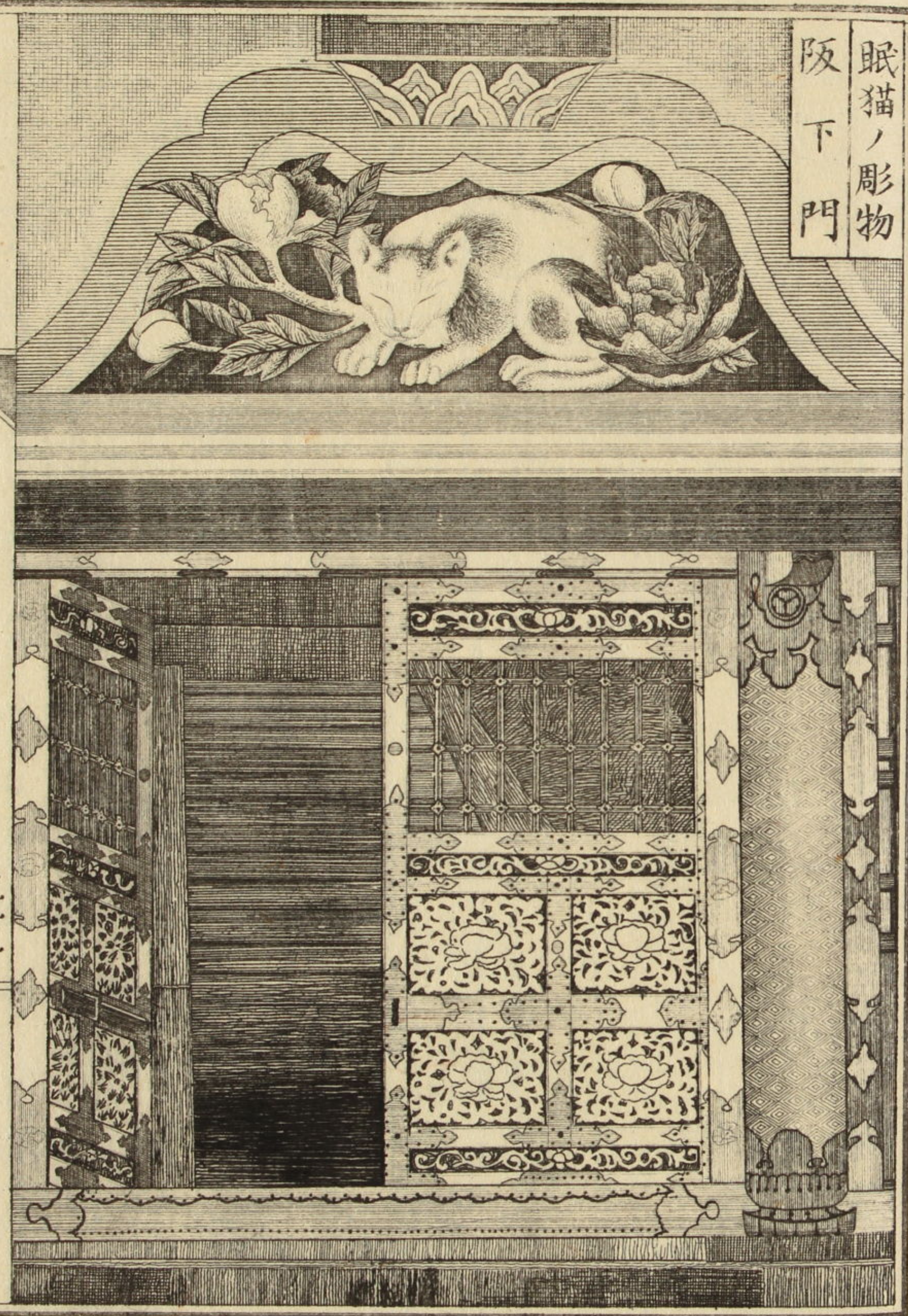
東照宮 本社

画ける丸龍ハ岩紺青を以て彩色を施し毎頭形を異せり内岸塵ハ二重両面の籠彫上ハ三十六歌仙の額を掲ぐ和歌ハ後水尾天皇の宸翰画ハ土佐將監光信の筆あり東の襖戸ハ金泥地ハ麒麟と竹を画き西ハ獅子を図せり樞幽守信の筆ありといふ其東ハ聽聞所とて當時將軍家着座の間あり北の上段ハ天蓋折揚造り其正中ハ伽羅木とて葵章一個を作せり簾を垂れて南北を界る東北の額羽目ハ椈の一枚板地紋を刺し唐木の寄木とて桐ハ鳳凰及ひ牡丹竹等を作為す又西方ハ大臣家着座の間と称を同く天蓋折揚とて正中ハ天人を彫る西北の額羽目ハ是も唐木寄木とて鷹及ひ松柏楓等を彫成す其精巧実ハ人目を驚うせり又拜殿と石間との界ハ堆朱の卷柱と称するもの四本あり

石間 拜殿本殿の中間は一室をいふ西方は拜殿人の入口より椈一段低く高麗縁の席を敷けり其席下一枚の石甃ありといふ是より本殿を拜すれハ正面の左右ハ金銀とて作る松竹梅の立花一對を捧げ殿扉の金彩眩輝して神威更ハ嚴然たり

本殿 前面七間側面五間二尺五寸屋棟ハ御所棟造りて千本勝男木を飾り破風ハ鳳凰の彫物手先の金色の模頭を組出し承塵上ハ白菊の高彫あり石間へ續ける手狭の上下ハ金の牡丹

眠猫ノ彫物 阪下門

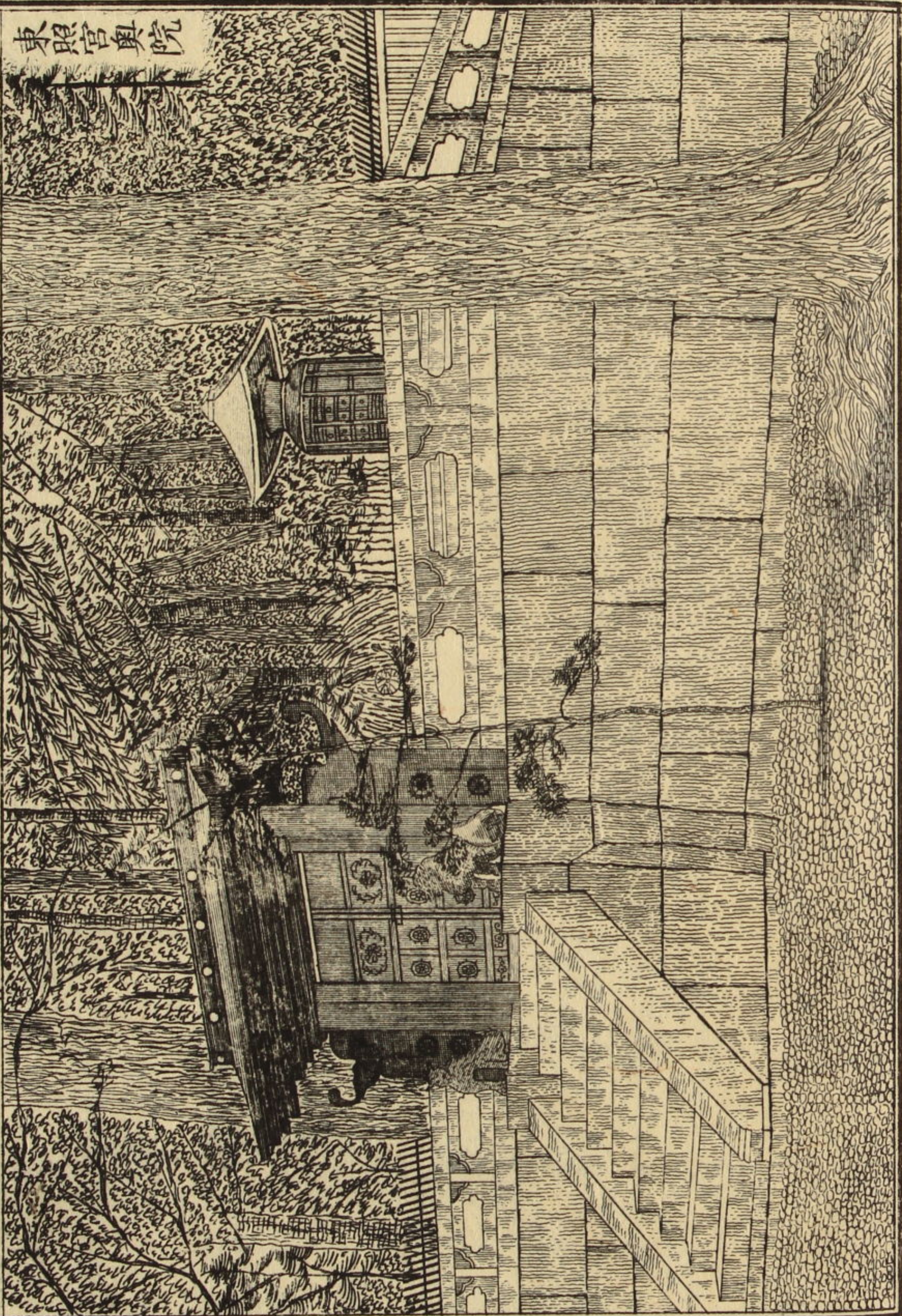


唐獅子を金刺す正面及左右の二間ハ唐戸を以て金鎖一中の左右ハ上部奥の左右ハ金地ハ獅子を画き服障子の松ハ天人を刺せり後面ハ中央ハ唐戸口を設け其左右ハ金地ハ獅子を画けり殿の内部ハ窺知るべからざるも正面あるハ幣殿次て内陣内々陣おと唱ふる宮殿有り云ふ

坂下門 唐門より東に當る廻廊の承塵上蛙股の内ハ眠猫の彫物有り 里俗殊ニ稱揚此此唐戸を出れハ即ち坂下門あり 桁上ハ松竹牡丹ハ双鶴柱ハ白地ハ紗綾形を刺し天井ハ蜀紅地ハ牡丹菊の折枝扉の羽目ハ牡丹唐草の透彫を彫刻す是奥院の入口の門あり

奥院 坂下門を入り曲折の石階を登ること二百余級して唐銅の鳥居に達す後陽成院の宸翰東照大権現の扁額を掲ぐ右方ハ宝庫あり銅板を以て之を包む夫より右ハ向へハ拜殿なり南ハ面す前面五間横三間内廻り格天井の内ハ五色の万菊を画く此奥ハ唐銅鑄抜の門を設け其左右ハ唐銅の獅子二頭蹲踞す是より石籬を廻らし内ハ黄銅の宝塔一字を鎮す高さ一丈許前ハ石卓を据へ三具足を備ふ宝塔の基石ハ八角にして五級なり

上御供所 東廻廊續きハ唐戸口あり



東照宮奥院

銅倉 東廂廊に接す銅板を以て外面と裏む故に名く種々の宝器を藏す

東通用門 東方より宮内への八口あり往事東照宮の東に大樂院として別處あり故に宮内へ出仕する者多く此門より出入せり

假殿 石華表の東方老杉陰森する処に矢來門あり是本社修繕の節假に遷座あり宮殿を往時毎歳十一月十五日當社前にて於て湯立の神事を行ひ國家平穩を祈り併せて神樂舞を執行せりと云ふ

唐門 南に面す前より唐銅の鳥居あり左右より瑞籬を廻り拜殿本殿と圍む

拜殿 前面五間横二間四方上段拜殿と本殿との相間も黒塗よりして本社石間擬す

本殿 三間四面街所棟四角椽柱に金欄卷正面の三扉に黒臙色に減金の金具を施し高欄滑椽階段共黒臙色頗る壯麗なり脇障子の金泥地は隨人と画り

唐銅宝塔 假殿の西にあり石籬を廻りす相傳ふ文化九年他火の爲に銅倉焼亡し宝器の灰燼とたる物を埋めて供養せし塔なりと云ふ

神官伶人以下の員數畧す

諸祭典式及奉幣式略す

二荒山神社 祭神大己貴命 勝道上人の創建日光三社の一也初めの社地河流に接近すと以て天長

年間洪水の爲に毀損せらるる之に因て上人徒弟道珍教是千如等と議り宮殿と小玉殿の東に

移せり後二十余年を経て座主昌禪和尚尊鎮法輪等と議り法華常行二堂の後 葉すり今今の佛岩辺より

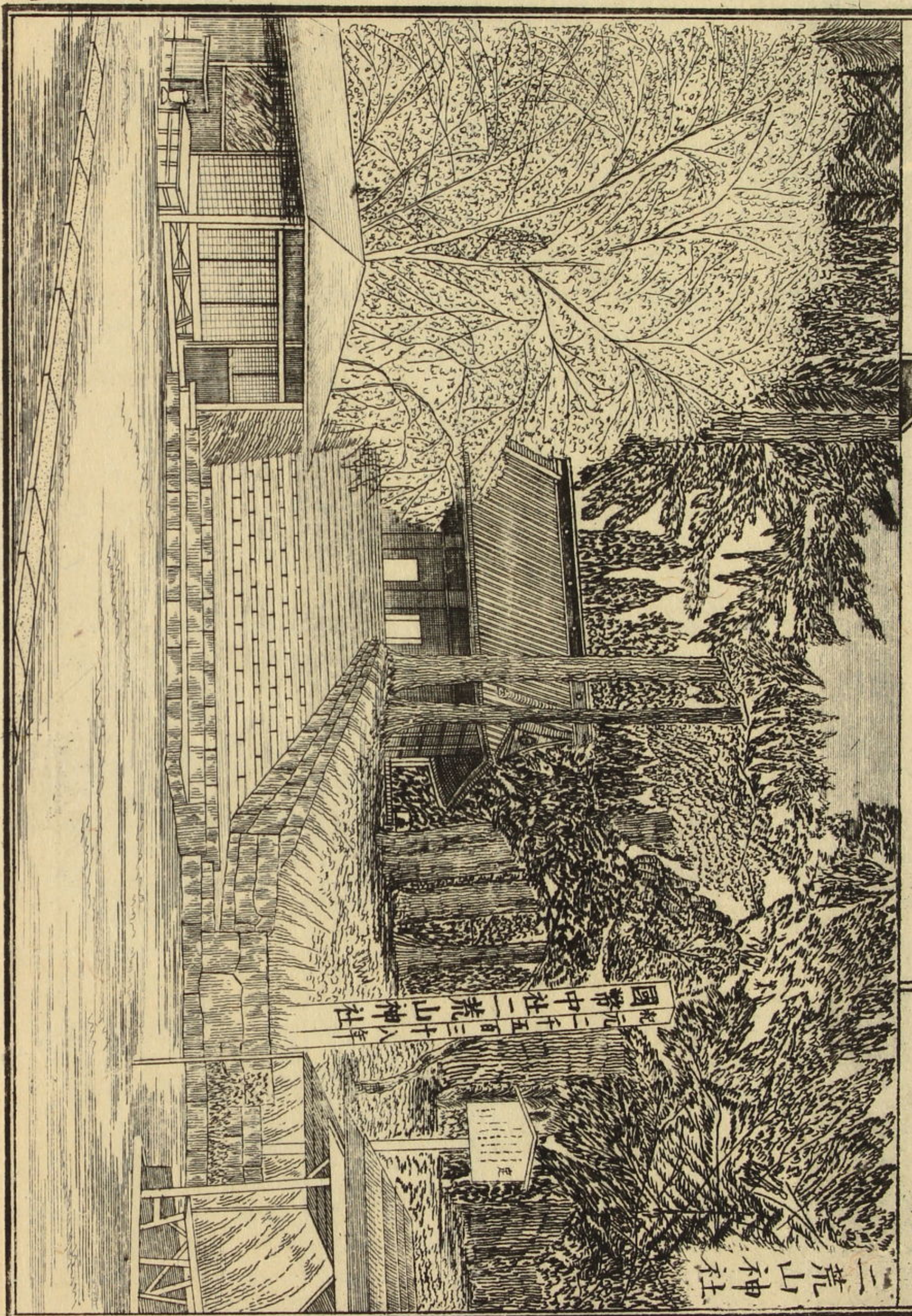
社地へ今の東照宮を移す是より四本龍寺の旧社を本宮と云ひ遷座の新社を新宮と稱す後

三百五十余年を経て兼元四年座主隆宣和尚再日常行堂の後移す後五年建保三年座主辨

覺和尚四條天皇の仁治元年鎌倉將軍を請ふて今の地に移し新宮を神殿と造營せり爾來四

百有余年兵亂止む時を為し祠堂も頽廢に至らんとせしを元和三年東照宮遷座あり及て廢と興し同五年富社殿門と新宮せらるるに至る旧時より比すも壯觀を増し數層後

明治の改革の際に末社等の佛を属するものい満願寺を交附し更し社格と定めて國幣中社と單一に二荒山神社と尊號す



鳥居 馬場の行詰りあり高さ二丈二尺周囲六尺五寸二荒山神社五字の額と掲ぐ往昔木

製ちしと寛文年中唐銅にて改造せると云ふ然し有柄川左府の御添筆なり

社務所 銅鳥居の北方旧三佛堂の跡あり往時の別所ハ安養院とて常行寺の東あり寺院ニ

し社家の内一藪なるもの社務と司どり一方今社務所と新宮ノ宮司と置て總掌せむ

拜殿 社務所の西に當る南に面す前面七間半横六間四方椽大床舞臺造りなり

本社 拜殿と咫尺す五間四方八棟造り銅葺總米塗なり前面の三扉ハ黒麻色前ハ唐門あり左

右より瑞籬を廻りて本社の後に至る唐門外に數基の石燈籠あり又瑞籬の左角に銅製の

大燈爐と建つ高さ七丈余里俗化燈爐と呼ぶ今猶數多の刀痕と見る正應五年三月鹿沼權三

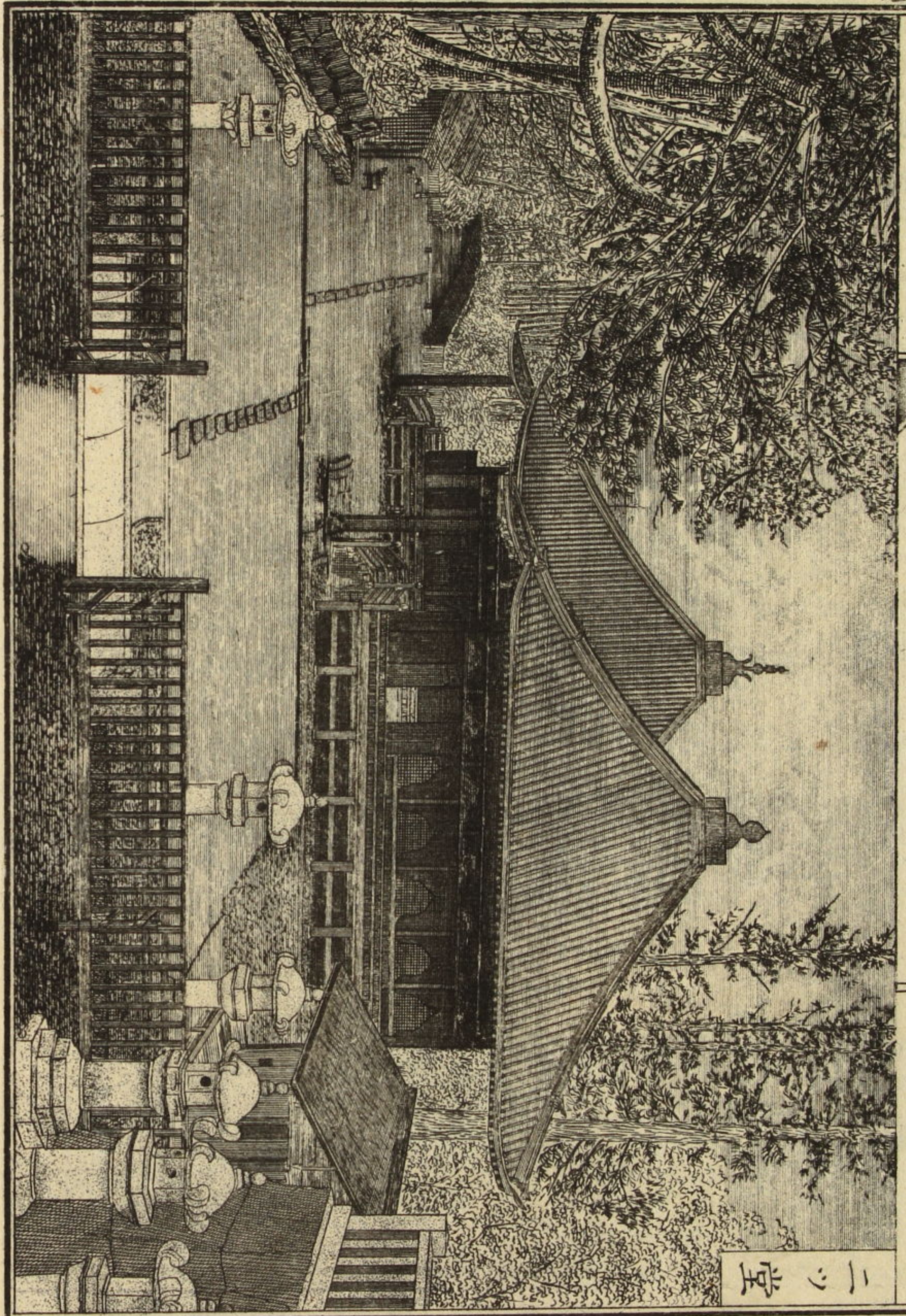
郎入道教阿の献する処日光神領ノ惣政所として當国抜群の名家なり 神宝畧す 神官定員

畧す 例祭奉幣式略す

常行堂 二荒山神社南面の階路と降き常行法華の二堂並立せり大なるもの常行堂なり

て小なるもの法華堂なり共ニ宝形造り此兩堂の間は歩廊と設け法務の便と許す常行

堂ハ大間十間四面本尊ハ宝冠の阿弥陀左右は四菩薩後ハ摩多羅神安置此二堂ハ嘉祥年



二王門

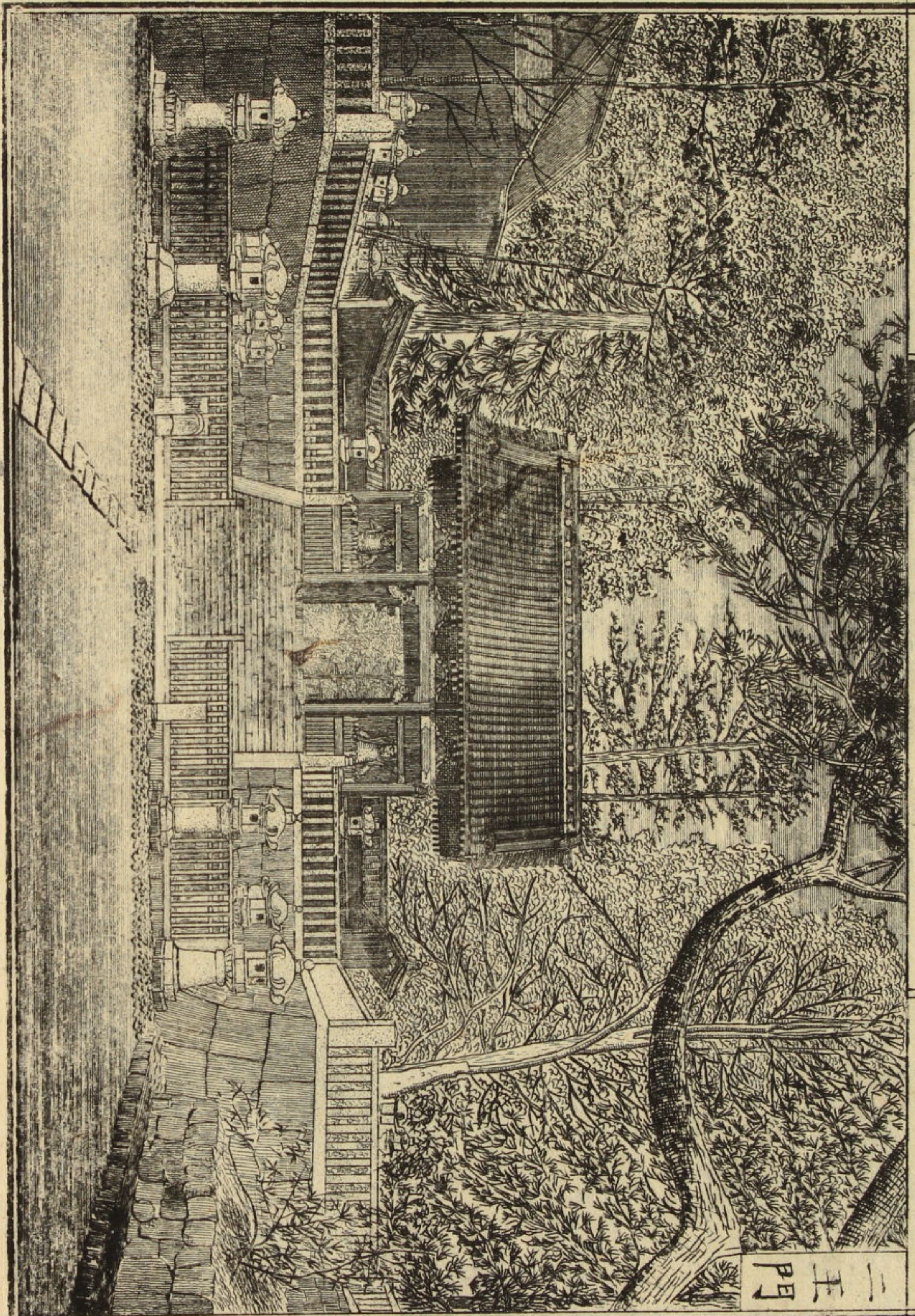
中仁圓大師始て登山せらと敷山は摸一之と創建して天台一派と興一衆徒と行て一ハ法華三昧の行儀も修一ハ常行三昧の法儀を行一ハ後鎌倉右大右府兩郷將の崇神と得文治九年當國寒川郡於て燈油料十五町の地と寄附せら一ハより賴朝堂とも別稱せ一由此兩堂の間は南方の坂路と登一ハ即ち慈眼堂に至る此堂初建の地ハ旧佛岩辺東照宮表門内三神庫まであり一

法華堂 常行堂の西に並ぶ大間六間四面也起立造堂のここの前に見ゆ各種の佛像及傳教大師書寫の妙典一部と納置を

靈屋 徳川三代將軍家光公の廟を常行法華二堂の前より西に當り靈屋の二王門を公ハ慶安四年四月二十日と以て薨を歳四十八大猷院と謚す遺命は因り靈柩と茲に歛む別所ハ龍光院と號す二王門の西北にあり

二王門 東南に面す前面五間横二間半三棟造り左右に右彌那羅延金剛左輔密迹金剛と安置す後面の左右にも同形の仁王と安置は是ハ東照宮の表門にあり一と移せりかると云ふ御手洗屋 二王門に入りて右方にあり中央の水盤ハ御影石より長八尺三寸幅四尺高さ三尺





五寸覆屋ふくや二間半にかんはん二間唐破風造にかんからやぶかぜつく柱はしら御影石みかげいし一隅ひとすみ二本と建た天井てんじやう龍りゆうの画えけ  
 る安信やすのぶの筆ふでなりと云ふ

寶庫たからぐら二王門におうもんの左方ひだりかたあり前面七間横三間種々の宝物たからものと藏たくわす

諸家献備燈爐しよけけんひとうろう總數そうすう三百十一基内唐銅からどう六十四

二天門にてんもん二王門におうもんより數歩かずふより左方ひだりかたは時ときとらりゆの之これなり東北きたがへは面めんす三手先造さんてせんぞう二重にちゆうの扇垂あふぎさき

木前後きぜんごの破風下やぶかぜした二頭にとうの躰たいを彫うり上段じやうだんの升組のぼりぐみ極細ごくさいまで下段げだんハ黒塗くろぬりなり大猷院たいとういん三字さんじの扁額へんがく

後ご光明くわうみやう天皇てんかう宸翰しんぱんなり前面ぜんめんの左右ひだりみぎは廣目持國くわうもくかこくの兩天りゅうてんと安置あんちすと以もて二天門にてんもんと名なづく

後面ごうごの左右ひだりみぎハ風神ふうじん雷神らいじんなり綠色きいろの風神ふうじんと朱色しゆいろの雷神らいじんとあり是これも東照宮とうしやうみやう陽明門やうめいもんよりしと

移うつせる方かたなりと云ふ

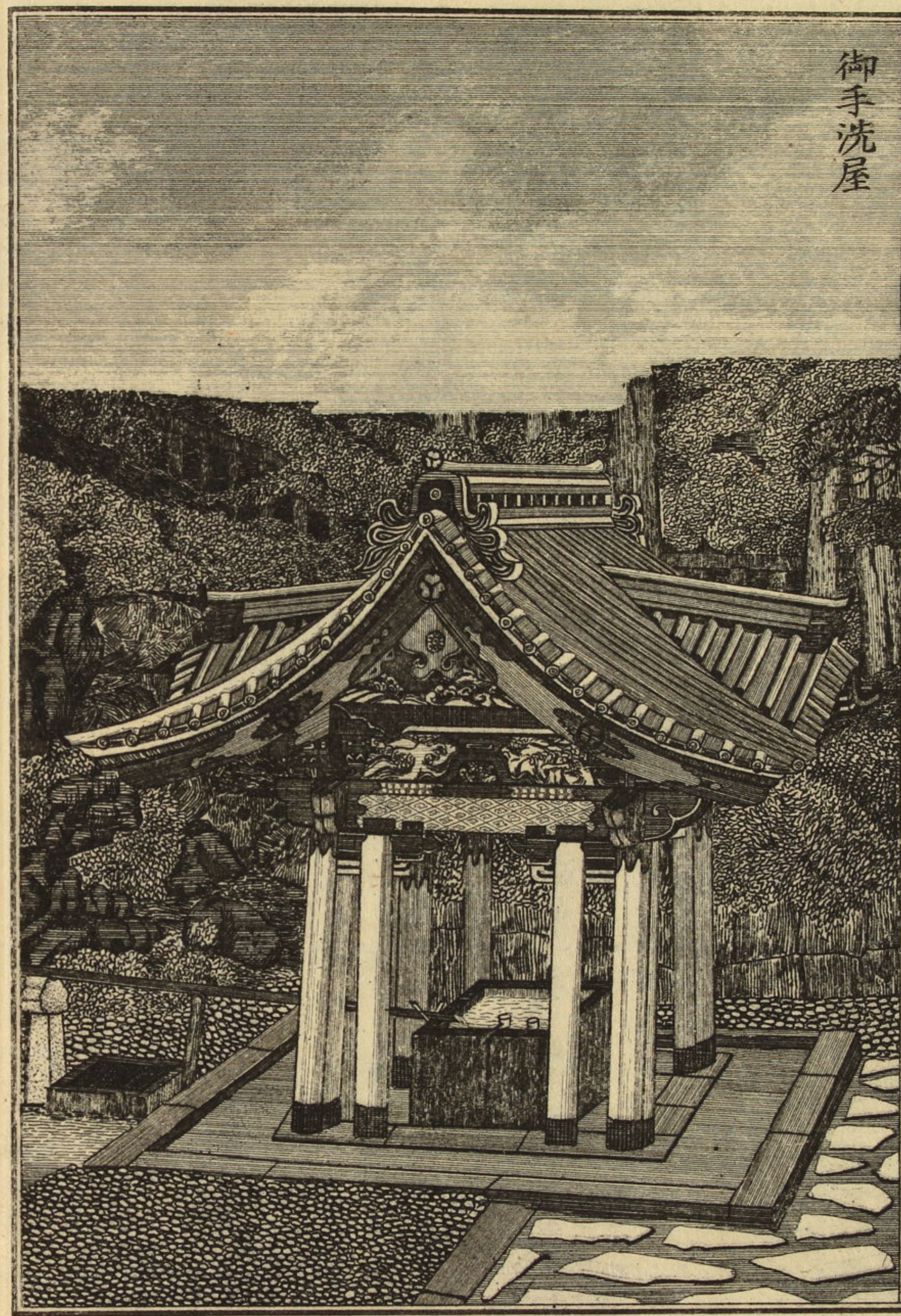
夜叉門やしやもん二天門にてんもんより右方みぎかたの石階いしざんを登のぼり左折ひだりまげして更さらは登のぼれは左右ひだりみぎは鐘鼓しゆこの二樓對峙にろうたいしす共ともは銅

板いと以もて樓腹ろうはらと裏うらは高さ各二丈八尺許おそむちやうはちふくさ其正面そのまへは眩耀くらうやうすゆのハ即すなはち夜叉門やしやもんなり前面四間

横三間半唐破風造よこさんはんからやぶかぜつくり兩面りうめんの左右ひだりみぎは捷陀羅毘陀羅けつだらびだら烏摩勤阿跋摩うまきんあはつま四色しやくの四夜叉しやしやと安置あんちす

を以もて夜叉門やしやもんと名なづく垂木たらいのぎハ物朱塗前後ものしゆぬぜんごの破風下やぶかぜしたハ牡丹ぼたんハ唐獅子からしし其下通そのしたとほハ金色きんいろの升のぼりと組

御手洗屋

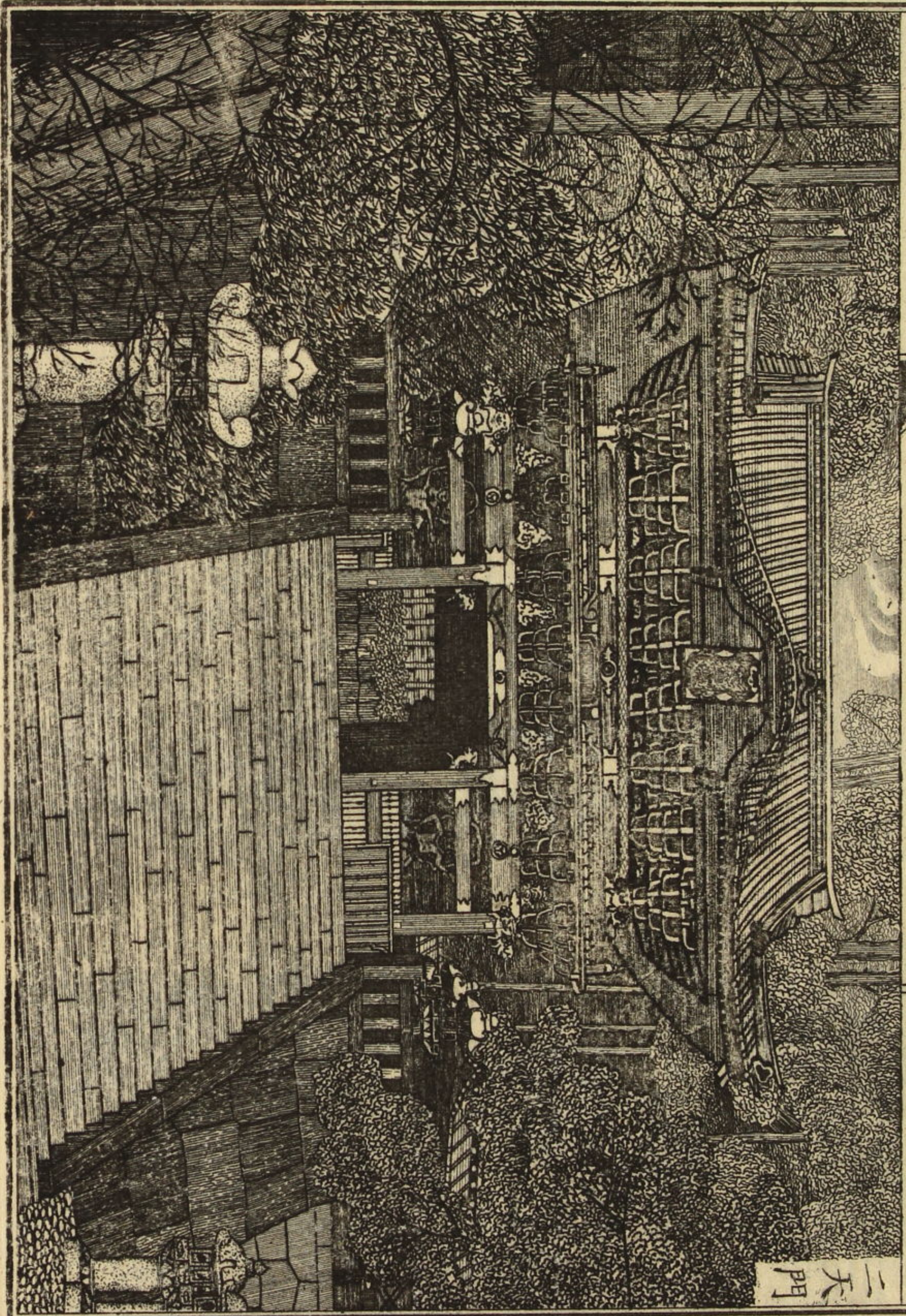


金鬼堂庭片

揚間あげまへは丸桁まるげ上うへに紅白こうはくの牡丹格天井ぼたんかくてんじやうの圓内まゝに唐木からぎにて牡丹ぼたんの折枝羽目せしえはめに牡丹唐草ぼたんからうそうの透彫すゐりをして満門まんもん悉ことごとく牡丹唐草ぼたんからうそうの彫刻てうこくなり柱はしらは朱塗しゆぬの菊形きくがた其他ほかは升組のぼりぐみより屋裏やうらに至いたるまで悉皆ことごと金きん巻まきして光輝ひかりあかり四方しやうほうを射いる左右さうじやうの袖屏そでびんは續つづぎ石垣いしゐきの間まに水みづく廻廊めぐりやうを設たく此門このもん以内いに兩邊りやうへんより本殿ほんでんの後背のちへを廻めぐり方形かたがたは數丈あそやうの石垣いしゐきを築きき揚上あがは老杉らうさう森々さんさんとして神威しんゐの嚴げんたるを知しまう古來こらい昇山しやうざんの靈場れいじやうを記しす者もの靈屋れいゐの内部ないぶは總くわて脱だつするに似にたり蓋けしは故ゆゑあらん

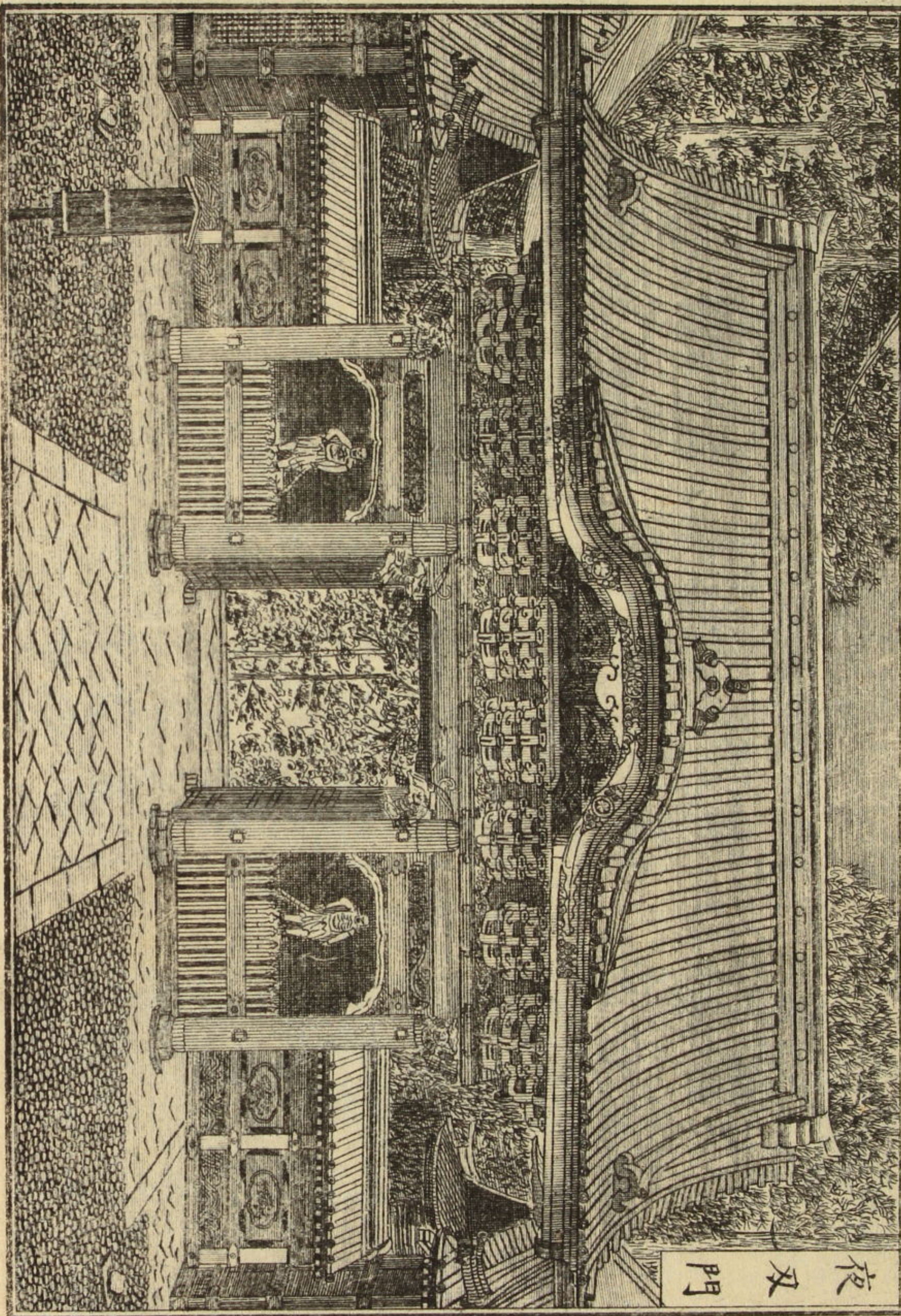
唐門からもん夜叉門やしゃもんの正面せうめん也間口まぐち一丈五寸いちじやうごすん前の正面まへの破風下やぶしに双鶴すわうかく平桁上へいげうへに白龍はくりゆうの丸彫まるてう兩柱りやうちゆうに丸まるの金卷きんまき後面うしろに柱はしら及桁げに悉ことごとく金地きんちに地紋ぢもんを刻きむ天井てんじやうに折揚せやうの格天井かくてんじやうをして菊きくの折枝せしを彫てうる門扉もんひは唐草からうそう左右さうじやうの袖羽目そでへに椀わん一枚いちまい板いたに秋あきの七色なないろを彫てう刻こす是こゝより廊らうを設たる席せきを敷して直ちやうに拜殿らいでんに至いたる羽目へに牡丹唐草ぼたんからうそうの透彫すゐりなり金具きんぐは都みやこて帛紗ひやくさ減金げんきんなり左右さうじやうより瑞籬すゐりを廻めぐり拜殿らいでん本殿ほんでんを圍繞にらうす

拜殿らいでん東北きたひに面めんす正面せうめん九間くけん側面せうめん三間半さんけんぱん千鳥破風ちどりやぶ向拜むかひらあり千鳥破風ちどりやぶの枇杷板ひらいたに獅子しし牡丹ぼたん向拜むかひらの破風下やぶしに雌雄めしゆうの金獅子きんしし簷下えんげの升組のぼりぐみに臍色せしきに七宝流しちほうりゆうの金具きんぐを施おし下の欄間らんのま四面共しやうめんとも松まつに鷹たかの彫物てうぶつなり虹梁にらう上うへに松まつに鷹たか手披てひに菊きくの籠彫かごてうなり簷頭えんづは減金げんきんの釣燈ついでん數個あまたを掲かげ唐戸からどに



二天門

龍と獅子とを刻む殿内の美塵上の桐は鳳凰の浮彫天井は折揚格天井より岩緑青を以て  
 丸龍と画く正面の左右はちから羽目各三界より獅子を圍せり押野安信の筆なりと云ふ兩傍  
 朝鮮國より献す釣燈二個を装置は又本殿へ續く處を相の間と云ふ兩辺は徳川三家よ  
 り献す金の柳梅蓮の立花及鶴力士等の燈書等を排列せり總て殿の内外金の押箔を以て修  
 飾すは故は拜覧の人眩耀魂を奪り  
 本殿 相の間より續く方五間半佛殿造二重屋根なり周圍は悉く彫物より金彩を施し左右  
 は唐戸口を設く椽は黒臙色より拜殿の前面より相の間の側面を過ぎく本殿の後背を周  
 廻す左角は御供所あり入るを許さば  
 皇嘉門 本殿右側の潜門を入るは白嘉門より即ち奥院の入口也樓腹は白堊を以て築造す  
 天井は天人を画けり  
 奥院 皇嘉門より石階を登り右折り更上登れば奥院拜殿の前は至る東南に面す前面五間  
 横三間前は石籬を設け左右は唐銅の手桶蓮花を挿む奥の宝塔は善銅製より高さ一丈  
 許基石は八角五重なり又拜殿と宝塔の中間は鑄拔門とて唐銅の堅門を設く是より圓筒の



石籬と廻らしく宝塔を圍む

空煙之墓

二王門内御手洗屋の北方石籬の外外圍の内あり安部豊後守忠秋の墓なり忠秋

幼より徳川二世事へて政を輔くること三十余年精勤殆と一日の如し蓋し靈屋近傍の地

は葬るゝ其遺願は出ると云ふ

梶氏之墓

靈屋の奥院近き御堂山より左兵衛督源定良の墓なり定良大猷公の靈柩は扈從

一來りて遂に還らば終年廟前事へて恩眷報わると云ふ元禄十一年五月卒す壽八十七

大學頭林衡撰文の碑あり

慈眼堂

天海僧正の廟なり常行法華二堂の間より登ること二町許よりて赤庫の前より達す夫

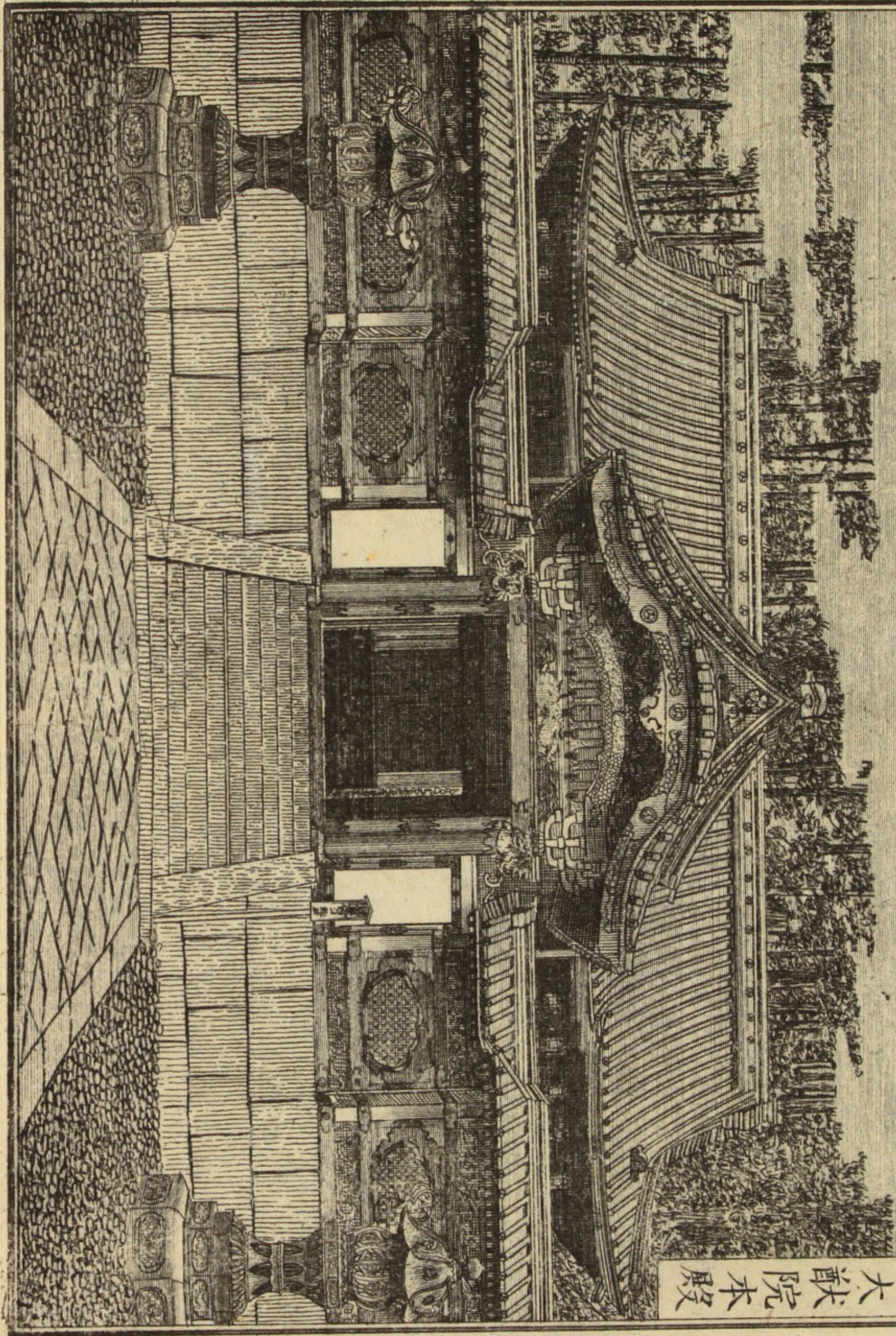
より右より向へい入口門あり其正面は即ち拜殿也師は慶長十八年當山の座主となり元和二

年大僧正に任せられ寛永二十年十月東叡山に於て入寂す慶安元年謚を慈眼大師と賜ふ

文珠堂 門外の左よりあり大師の本地堂なり

供所 文珠堂の南に接す

求聞持堂 供所の南よりあり虚空藏を安置す



大猷院本殿

阿彌陀堂 門内の左にあり石像の後の羽目黒板に昇海和尚の銘文を白字にて三尊の石像と安置す

座主宮廟 阿彌陀堂より左の石階を登れば禮拜所を設く石籬内は宝塔十二基を安す

功德水 拜殿下の左方にあり御手洗井あり

鐘樓 門内の右方にあり

經藏 鐘樓と並ぶ一切經及内外典籍を藏す

地主神社 拜殿の東北にあり稻荷社なり

石燈籠 門内の左右に並列す徳川三家及旧諸侯の寄進する處

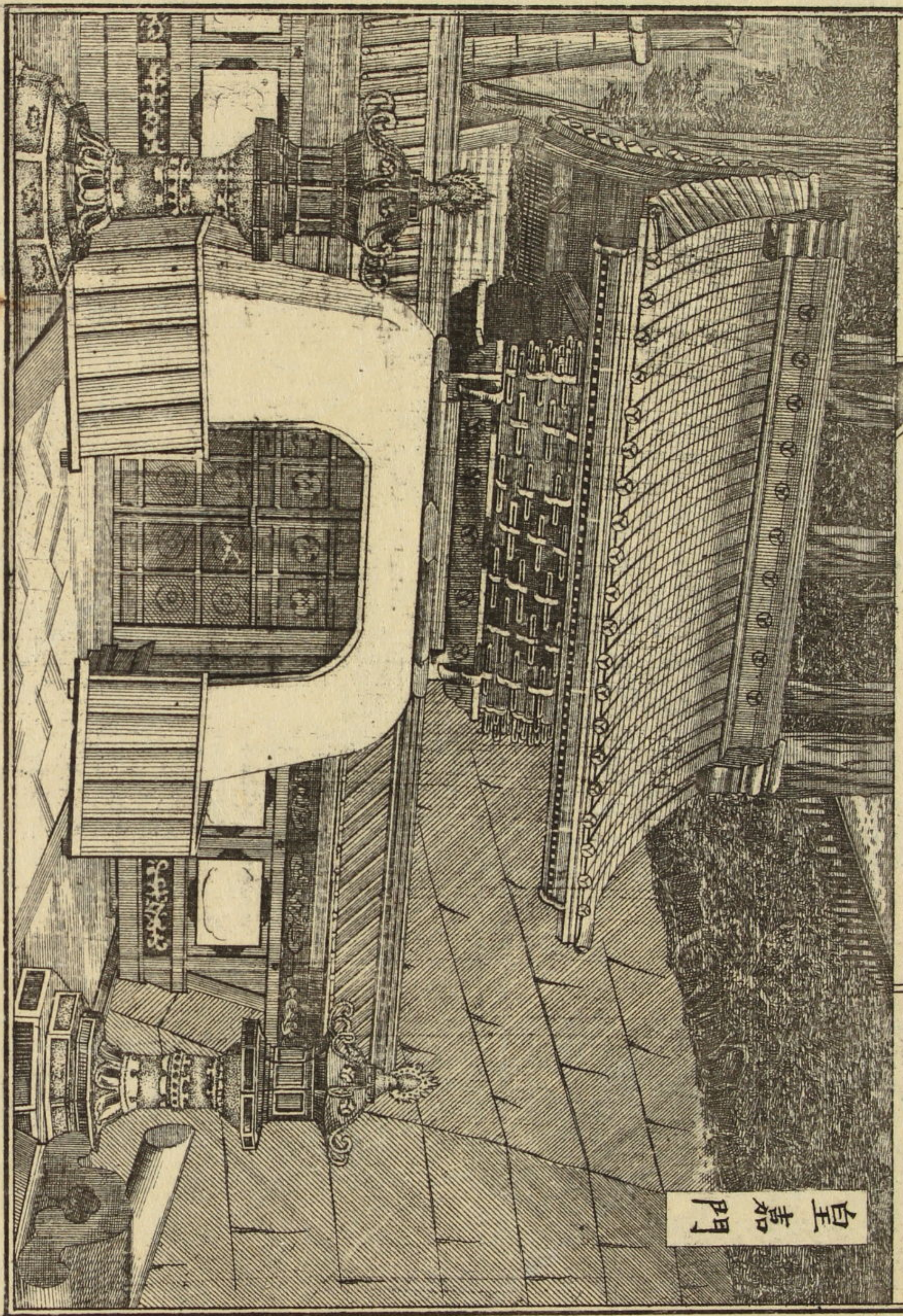
拜殿 南に面す八棟造り向拜あり前面五間半横三間半總朱塗殿内の彫画頗る美なり毎歳

十月朔日速夜に論議を行ひ翌正當日一山の僧徒總出仕りて法華八講を修行すと云ふ

寶塔 前面の石籬外は石卓を設く高さ四尺長三尺上は石の香爐獅子を置く左右は石造の

花瓶あり宝塔の御影石にして高さ九尺許周圍は六部天梵天帝釈持國廣目增長多門の石像

にて護衛せり石垣の高さ四尺許上は石籬を廻らし入口を設けず是人の登ると禁する為なり



金鬼堂

彦坂光正墓

佛岩旧護光院の境内あり

九兵衛と稱す初め駿府の町奉行より進て紀伊の附

家老とたる家康公の薨去の後職を辞して當山に投し薙髪して護光院と号す庵室を結て神

廟を奉仕すること多年没後該庵を衆徒の一寺と爲て護光院と稱す開基圓海和尚たり

小玉堂

佛岩あり弘仁十一年九月弘法大師龍尾に於て佛眼金輪の法と修す一七日結願の

夜池中一小白玉を現す是天補星なりと因て一字を建立して小玉堂と稱す

教皇座主墳墓

旧大樂院境内庫裡の辺に塚あり往古より座主の墓たりとて不浄と禁じ

崇敬せり近傍に勝道上人の墓ありと云傳ふ即ち上人の開祖より座主の第世の祖師なり

佛岩

東照宮の東に當り東山谷に接し旧寺院坊舎のありし処と云ふ往昔山際佛像に似

る岩三四個ありしが山崩れて共ニ陥没せり然も終に此地の名稱といをまり是より瀧

尾への本道より同社まで八町許や平坦なり

開山堂

一名地藏堂と云ふ瀧尾道の左方あり東に面す六間四面二重宝形造り堂内は開先

院の題額を掲ぐ本尊は地藏菩薩石土間須彌壇上は厨子入上人の影像と安し左右に十弟子

の像と配置せり又此辺に離布畏所と唱ふ蓋し上人茶毘の地なりと以てなり堂の後ろは五

輪塔は石籬を廻らせり上人の墳墓なりと云ふ  
 産宮 開山堂の南は並ぶ里俗傳て姪娘の婦女將基子の形を作り香車と書し社壇は祈りば  
 平産すること妙なりと其所以と知らば

手掛石 龍尾道の右側にある大石なり

飯盛杉 古木より周回二丈三尺往時ハ枝葉地は垂きて飯と盛り如くなりしと云ふ是より

數十歩よして初門と云龍尾の惣門ありしが方今只礎石を見しのみ

龍尾社 祭神田 弘法大師の建立なり傳云ふ弘仁十一年七月大師始て登山して教吳道珍の兩

師と俱に龍尾に至り其靈境たりと感ト庵と大杉の下に結びて秘法と修す已より神女

の冥勅を蒙り因て神靈を旧中禪寺に祀り社殿を龍尾に創建し女體中宮の四字と書し題

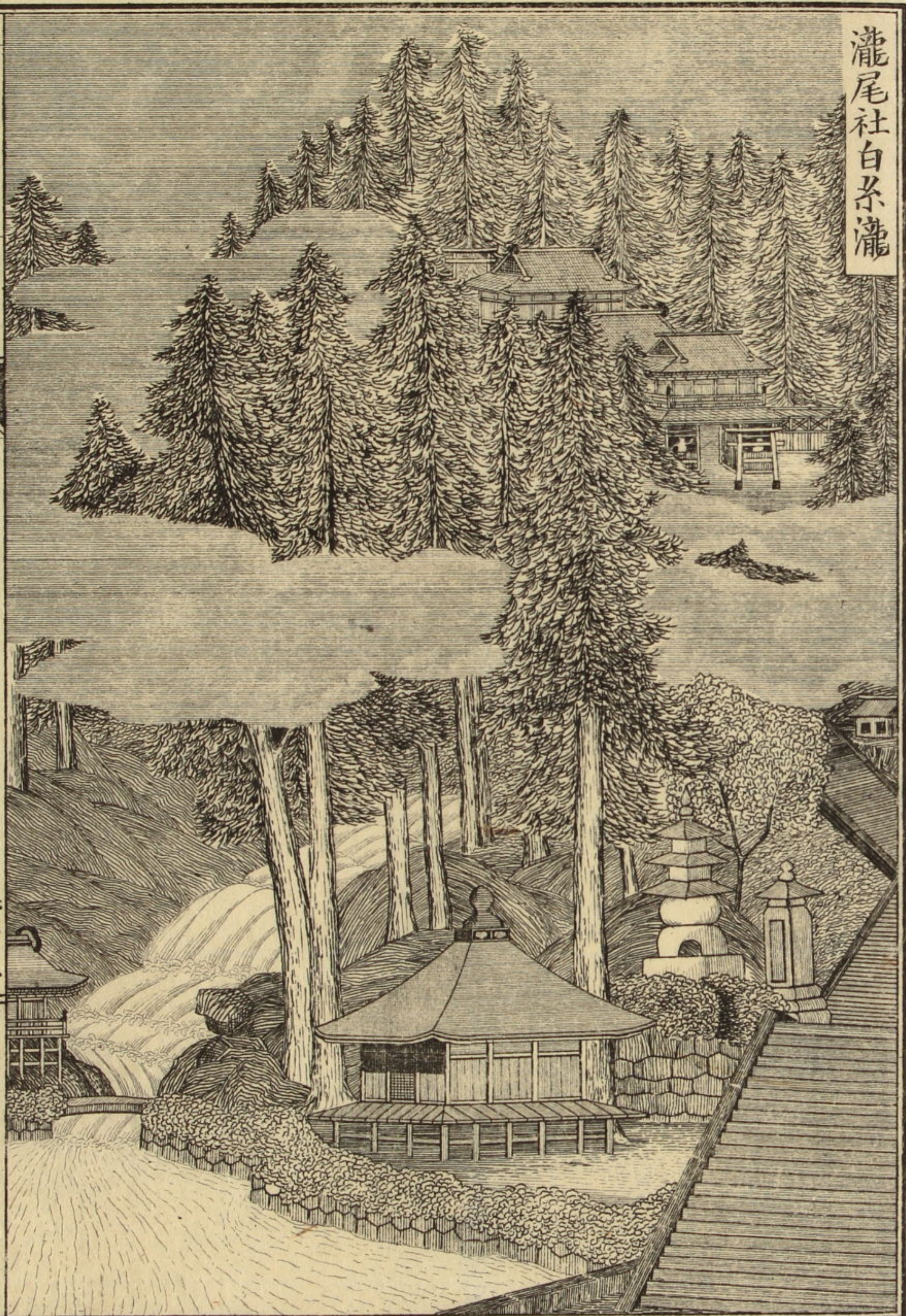
額と爲せりと此歳十二月大師上洛して奏聞と遂に龍尾を以て御祈願所と爲せりと云ふ

不動堂 道の左方石階の下にあり二間四面本尊二尺許左右に二童子と安置す共運慶の作

なり溪水を隔て南に山王の神社あり

龍尾瀑布 一は白糸の瀧と云ふ不動堂西方の巖より飛流すること凡二丈許其形勢數派

瀧尾社白糸瀧



二分は恰も素糸と懸るに似たり故に名づく田國雜記云龍尾と申侍るに無双の靈神あり  
ありくたる飛龍の姿目とぞやろりし侍りき

坊を歴く結ぶちさりのまなきやこの跡の尾のなきのあらういと

別所 石階數級と登り右方あり往時に當山の衆徒五年を以て交代し又社家の二膳なるも  
の社務と司りしが明治維新以來佛は属すもりのに此別所へ移集して保護す

經筒 長六寸余口 銅製の古器なり文政年中路傍の石の下より掘出せりと云ふ此筒は銅は滅  
徑三寸三分

金と施し内外二重なり内筒は銘あり讀むことを得べし別は一筒あり銘字の半を没す

觀音堂 別所の西よりあり阿弥陀佛と安置す

影向石 觀音堂の西よりあり往昔弘法大師女體神影と拜せし石なりと云ふ

石華表 梶氏に建進す處なり

樓門 前面三間余横二間許總赤塗なり

拜殿 前面四間横三間上部は黒塗余は赤塗なり

本社 東南より面す前面三間横二間向拜造り前中門と設けて瑞籬を廻らす中門内は禮拜石

と名つくる平石あり周圍は手摺矢來と設く

本地堂 拜殿の西よりあり二間四方赤塗なり惠心僧都の作弥陀觀音執至の三尊と安置す

千手堂 本社の西よりあり二間四方黒塗なり本尊は六尺許の立像開祖上人の作なりと云ふ

多宝鐵塔 千手堂の北よりあり堂の一間四方内は鐵塔を置く高さ一丈許塔腹は銘あり

三本杉 奥院の神木なり本社の後より當る瑞籬を廻らし前より鳥居あり此地に神女の出現有し

處なりと云傳ふ是より西より酒泉子種石なりと唱ふのあり由來畧す

筋違橋 此所の本社に地境より是より下向道なり橋の南より行者堂へ登る坂路あり

行者堂 坂より頂上よりあり本尊は役小角左右に前鬼後鬼共は運慶の作なり坂を下まじ靈水

あり

藥師靈水 坂路の山際よりあり眼病を患ふものの目を洗へば効驗ありと云ふ方今此水を引用

して二荒山神社内の水盤は洒く

天狗堂 二荒山神社社地後背の山上よりあり寛永十七年將軍祈願のことあり爲は天海僧正自

ら繩を曳て建立す處なり堂は南向よりして三間は二間堂内天狗を圖せらるを以て天狗堂と



唱となふ是こゝより復ふた常つね行ゆ法ほ華け二道にちの道みち下くだ戻もどる

秋元康朝墓

旧照尊院境内まじりあり但馬守たにまのりと稱いす東照廟造營とうしょうぼうぞうえいの命めいと奉ほうト勤勞きんらうすこと年としあり没後むつご謚なしく照尊院しょうそんいんと號ごうす後同號のちどうごうと以もつて一寺いちじと創立せうりつしく神廟しんびやう事ことふ蓋い遺言いげんより因よる

と云ふ

青龍神社

賄坂まひざかと下くだり西町にしまちへの入口いりぐちあり此社このやハ元弘法大師もとこうぼうだいし唐土からつち天台たいたい山さんより移うつりて京都きやうと醍醐だいご

圃う子こ創立せうりつせると後のち又また當山とうざんに勸請くんきやうせりと云ふ

西町

或あるハ入町いりまちとも唱となふ山内やまうち西方にしほうにある市街いちがいの總稱そうしやうしく四軒町しけんまち原町はらまち袋町ふくろまち本町ほんまち土中つちちゆう下大工くだいく

町上中下板挽町是なり

淨光寺

板挽町いたびきまちあり還源山えんげんざん妙覺院めうがくいんと号ごうす即すなはち西町にしまちの菩提寺ぼだいじなり弘法大師こうぼうだいしの寫字しやうじ九梵字くぼんじ及

妙覺門三字の題額等と藏すと云ふ

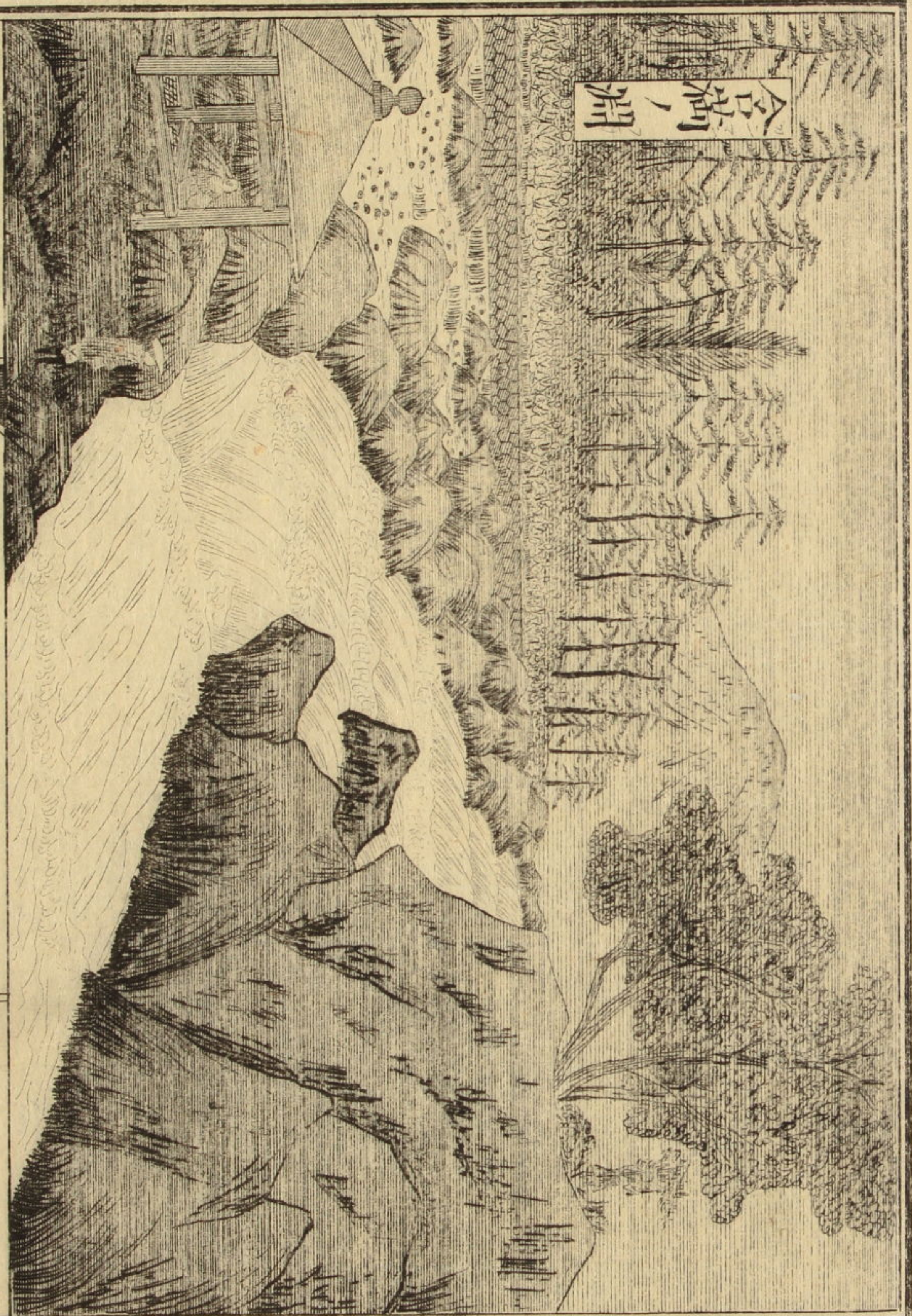
向河原

大工町おおいまち板挽町いたびきまちより大谷川おほやがわの橋はしと渡わたりて含滿淵くわんまんえん鳴蟲山めいしゆうざん等らへ達とちするの道みちなり

憾うらみ餘あま淵ふちも書かす

向河原むかえはらより五六町けいろうちう溪流せうりゆうと迦たれは北岸きたがしに絶壁せつへきの大石たいせき峙たりて削けるが如ごとく其形そのけい

勢せい甚しん奇き異いしく鬼工おにこうは異いなり頂上ちやうじやうは不動ふどうの石像せきざうと安あん其下そのしたハ激流げきりゆう盤渦ばんくしく淵底ふちのそこ謀まり



知るべからば絶壁の平面は憾餘の大梵宇を彫る慈眼大師の高弟見海の書なりといひ世俗弘法ノ抛筆といひけし空海と見海と音相近きを以て誤まるあらん年代の相距る七百余年渾渚すべきとありて含滿の聚雨ハ日光八景の一なり

靈庇閣 含滿淵の溪上ニ護摩壇あり靈庇閣是也圓柱の四阿屋より幽趣愛すべし此境ハ

見海和尚の草創より北岸不動の石像ハ即ち同師の造立す。処護摩壇亦同時の建立なり

りと又左の丘上ニ石弥陀の座像數百並列す此前を過一町許より溪岸ニ骨塔あり

納骨塔 礎石ハ突碇より大石より高さ一丈余直徑二間は出入す後背ニ穴を穿ちて骨を納

む其上ニ林羅山撰文の碑あり

鳴蟲山 含滿の南方ニ當り高山より東西ニ延亘す冬峰行者の修法を行ふ處此山紅葉の勝

地即ち鳴蟲の紅葉ハ日光八景の一なり

松立山 毎歲冬峰行者松と殖立るを以て名づく行者山上より秘法を修し昇平と祈ると云ふ

釋迦堂 原町ニあり南ニ面す七間四方赤塗なり本尊ハ阿弥陀脇士文殊普賢の座像其他慈

眼大師の肖像及勝道上人の位牌を安せり前ニ石燈籠ニ基あり一ハ加藤左馬一ハ石川主殿

頭と銘記せり梵鐘あり慶安二年の寄進あり

殉死墓碑五基 釈迦堂の西にあり此他諸家の墓碑十九基二行に建並ぶ皆殉葬あり

- 女性院殿心隱宗ト大居士 堀田加賀守紀 朝臣正盛
- 芳松院殿全巖淨心大居士 阿部對馬守藤 原朝臣重次
- 理明院殿光德徹宗大居士 内田信濃守藤 原朝臣正信
- 靜心院殿一無了性大居士 三枝土佐守源 朝臣守惠
- 眞性院理哲玄勇居士 奥山茂左衛門 尉藤原安重

各慶安四年四月廿日とあり

犬牽地藏 釈迦堂の辺にあり初め勝道上人男體山へ登らんとする時溪水の激流を見て躊躇

せざるを忽ち地藏菩薩出現して諭示す因て上人手刻して建立せりと云ふ後板橋將監と云者

獵犬を繫て湖中に投ぎるに地藏終に犬を牽て岸に上りてを以て名に呼ぶと云ふ

禁断石 龍尾及御堂山の西北廿町許の後山に建設す殺生禁断の標せし碑あり土人略語

して禁断石殺生石と唱ふ此碑より十町許山上ハ里人の獸獵を業とまざるもの多くハ此



所に入る是より西北へ七滝あり

七瀧 女貌山の懸崖に懸まり即ち稻荷川の水源あり然れど川に沿ふて行くも巨巖多く荆棘路を塞ぎ且深く溪間へ入れを却る瀧の所在を失ふに至る故に瀑布を觀んと欲せし殺生石の山路を行くを好と此路笹原に一里半も行けば四方開濶十里を望むべし此處女貌と山脈相接し北方七所より飛流する瀑布あり或は十丈或は十五丈勢ひ飛龍の如く其下へ水烟濛々として測るべからば實に壯觀と云ふべし

女貌山蔓延松 姫小松と称する五葉のものなり山頂より少く北裏にあり此松怪岩巨石の上を蔓延すること凡八九町東北へ谿谷を越て五六町西南へ二三町許而して其根株の有所を知らず只枝葉の方向を以て速近を計るのミ夫斯の如く天下復有や無や

氷岩 稻荷川の北岸即ち外山の麓にあり其岩穴は盛夏と雖も氷のあるを以て名づく  
摺子岩 前同處にあり大さ凡二間四方其形状の似たるを以て名づく  
不動岩 前同處の上より高さ凡三丈許其形状の似たるを以て名づく  
外山 稻荷川の北岸に直立する孤山あり登攀凡十町余半腹以上の嶮巖にして鎖を捫りて登

霧降之瀧



る所あり頂上に毘沙門堂及龍堂を築造す此山巔尖頭にまつりみみせ松樅茂生のぞ東南數十里を望

む

興雲律院 外山の東麓にあり天台律なり享保中座主公尊法親王の関基ういぎよりあーせう関山の和尚と

云ふ樓門にあんぎやう枕鐘を釣ぶつせんり佛殿にあひく戒光殿の額を掲あひぐ此地いんかの人家に速く境内殊に幽静なり

小倉山 律院より七八町東にあり此山高からざるも峯頭まつのぎは松樹並列ふうけい絶佳あり即ち

小倉山の春暁はるあけの日光八景の一なり往時かうし此山の西麓は御茶亭とこもんす御門主の別荘ありと云

ふ

霧降瀧 小倉山の麓より崎嶇きくして北行ほくかうすること一里余山頭さんとうに至れのぞば遥かに瀧の上部を見る

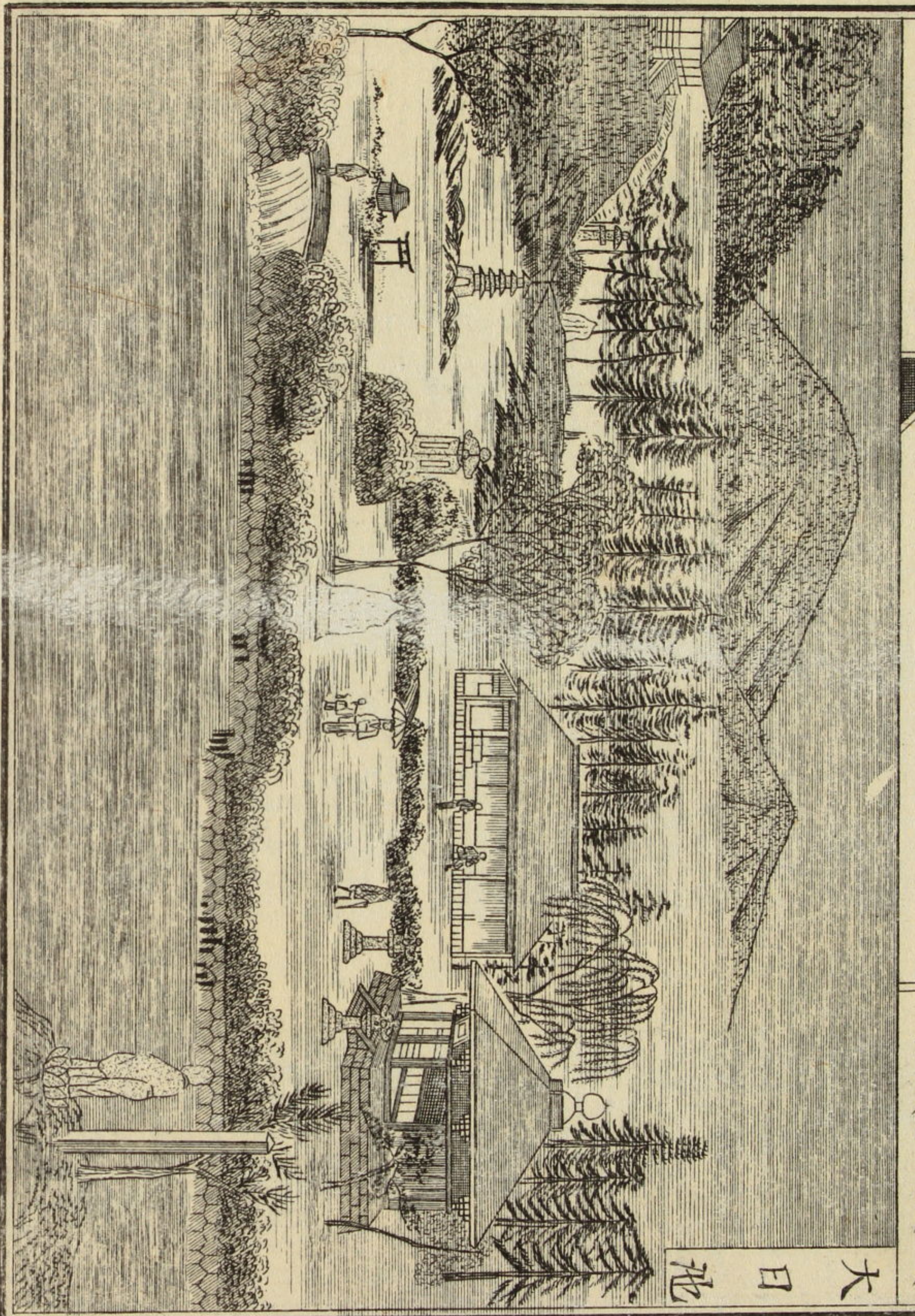
夫より九々折なるけんた峻隘の小路を下ること三丁許仰たうりで瀑布を望むべし高さ二十余丈巖上いんの上より

大半降りて二派に分る其水球突起せる怪岩かいがんに觸ふれて飛散ひさんすること烟霧えんむの如ごとく名實めいじつ當を得

たり

華石町 原町を過ぎ田母澤を越これの人家相接いんかす此所を華石町と云道の左は蓮華石れんげいと称なづする

石あるを以て名つけしと云ふ



大日池

久次良村 華石町と相接す西北の寂光の山口に至り西より南の荒澤の嶮山は續り東西

凡十五町此辺名區の尋ねべきもの多し

大日堂 久次良東方の一境地に小堂あり大日如來の木像を安置す中庭の池中より冷水常に涌出極め清潔なり此地に含満と溪水を隔て風景殊に愛すべし

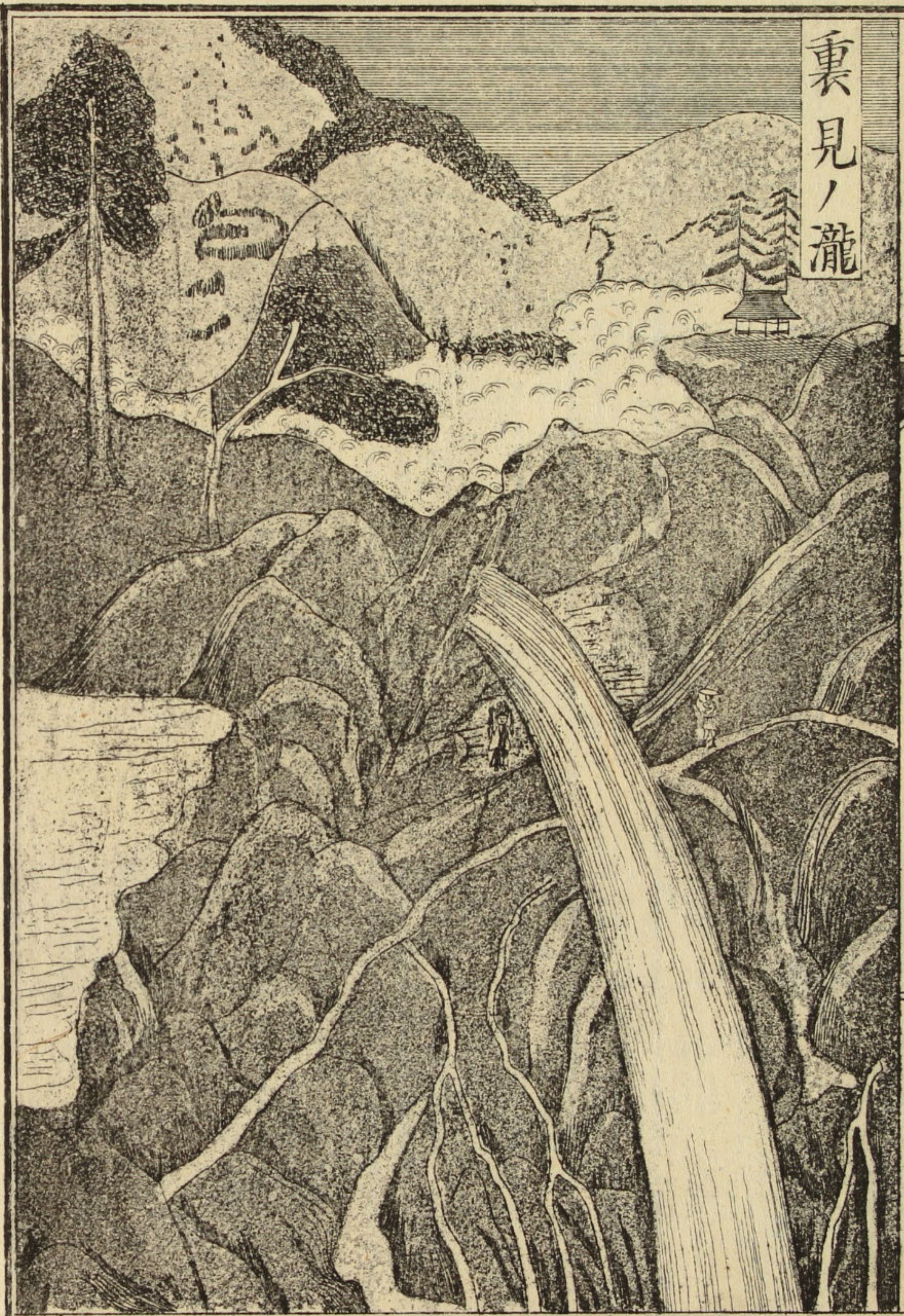
若子神社 神橋より一里余久次良村の東北に當る路傍に池石と云ルのあり五六尋の大石にして上面の凹所に水を貯へ旱天よても渴まることなしと云ふ是より二本杉を経て境内に至る此地に有名の舊跡よて若子神社及弘法大師の関基寂光寺等ありて諸堂立並ぶ頗る壯麗なり

明治准新以來二荒山の司掌に歸後十年三月田祿一罹り悉く焼亡して荒蕪に屬せり惜哉此靈場探勝の人誰り大息せざる者あらんや

若子瀧 一名布引の瀧と云ふ高さ凡十八九丈數級に飛流す此辺岩石相連りて淵潭あり故に瀑布岩面を奔流して布を引異あらば

裏見瀧 荒沢の瀧と云ふ久次良村の大日堂より數歩にして右方に標木あり此處より十七八町許初て荒沢の一茶亭に達す夫より道を右よとり巉岩の徑路を昇降して溪橋に至る此

裏見ノ瀧



橋上より瀧の前面を望観せば其左右は又二小瀧を懸まり此橋の左より嶮岩を踏小瀧を渡りて迂回すまへ即ち瀧の裏面を掬まべし此瀧ハ山上の盤石突出せること一間余の鼻端より飛下まざるものにして其高さ十余丈幅六七尺水勢頗盛なり又其裏面の路幅ハ五尺許以て自在に潜行せるを得真に無比の奇瀑と云へし又荒沢の茶亭より清瀧村へ出る間道あり

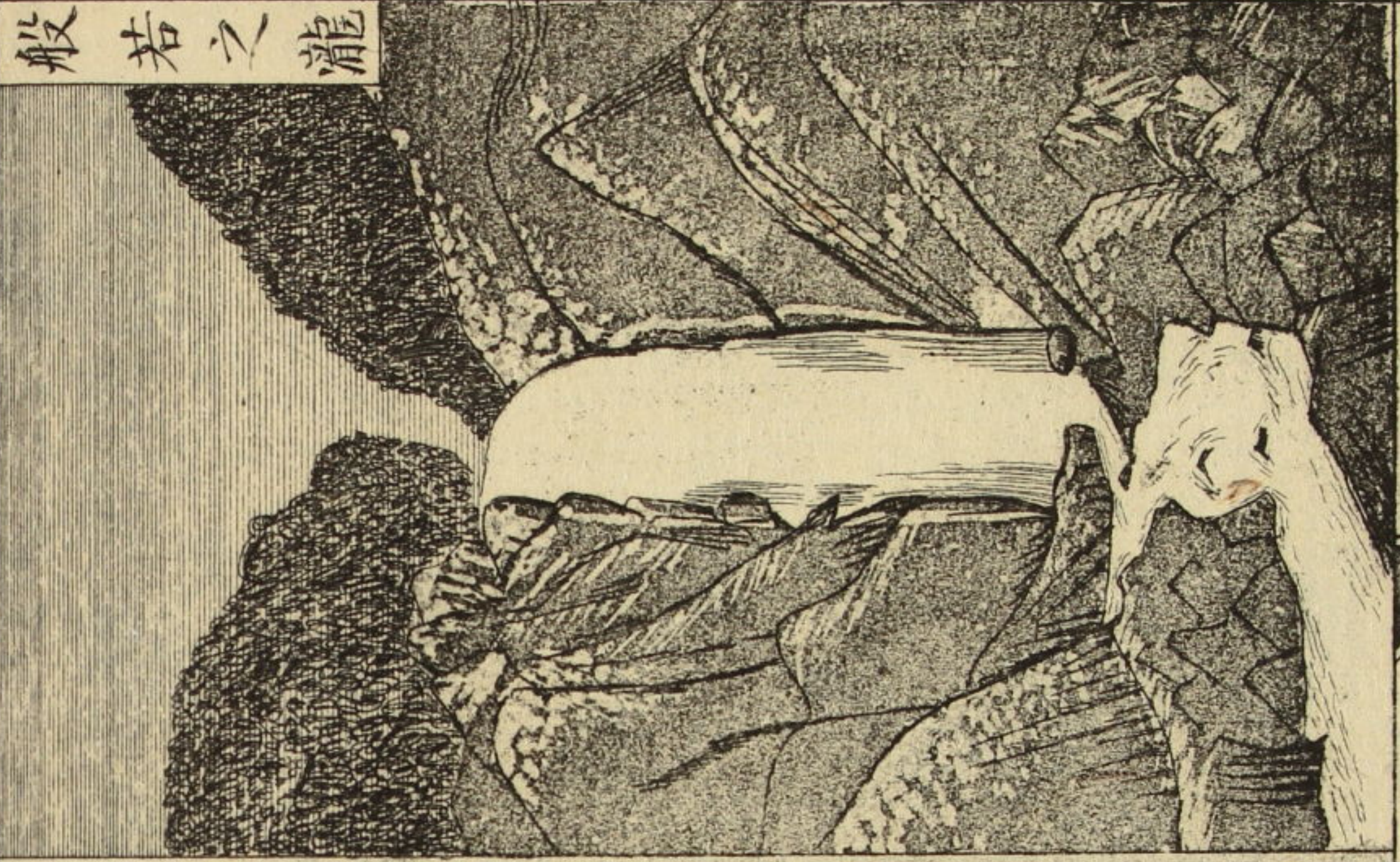
清瀧村 神橋より一里許入口の字を島居原と云ふ往還の右方に清瀧の神社あり弘法大師の勸請よして天竺大鷲山の金毘羅大権現を祀まるなりと云ふ往時本社の後には當り老杉茂り峻岸聳る所に清瀧ありし近來伐木せしより其瀧を見古來樹木を以て水源と云今其實

を見る

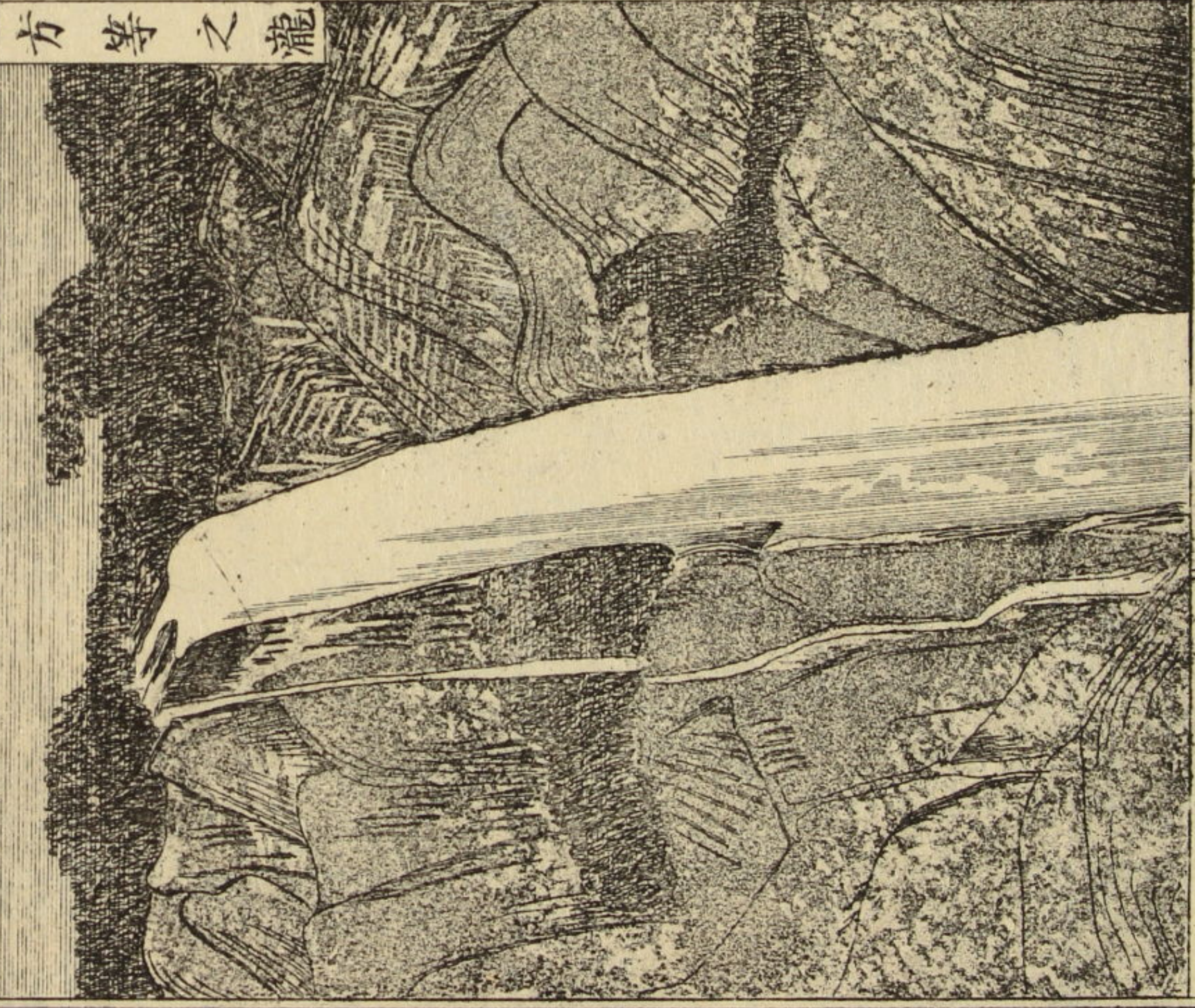
清瀧観音堂 六間四面木尊ハ勝道上手刻の千手大士なり旧中禪寺ハ女人の登山を禁るににより茲に安置して女順禮の禮所と為せりと云別所ハ本堂は相並ぶ是より右ハ中宮祠道に於て左ハ足尾道なり其先に細尾と云村落あり

馬返 細尾村の一部落なり清瀧村より坂路一里許往時此より馬を返しを以て名つく戸數七八軒茶肆三戸遊客の休憩所なり

龍之若般



龍之若方



前二荒山 馬返より五六町にして右方に數十仞の峻崑對峙す男體と女貌との如し故に前二

荒と云其峭壁に洞穴あり遙に之を望めば堅五六丈幅六七間許にして淺深固より知るべか

らば此洞穴に種々の云々あれども事長らまば略す

深沢茶屋 馬返より岩石を踏之危橋を渡り更に峻路に登らんとする地に設く此先に地藏

堂あり土俗女人堂と唱ふ

劔峰 昔時の峻難にして白刃を渡るに似たるを以て名つけしと方今の車馬共に往來す此処

に一茶亭あり瀑布を觀るの好憩臺

方等龍 此辺總て深谷にして峻山並び聳ひ遙に北方を望めば瀑布の飛流すること十余丈

般若瀧 同處より西南に當る飛泉の高さ十二三丈幅三四間方等に比されば水勢遙に盛なり

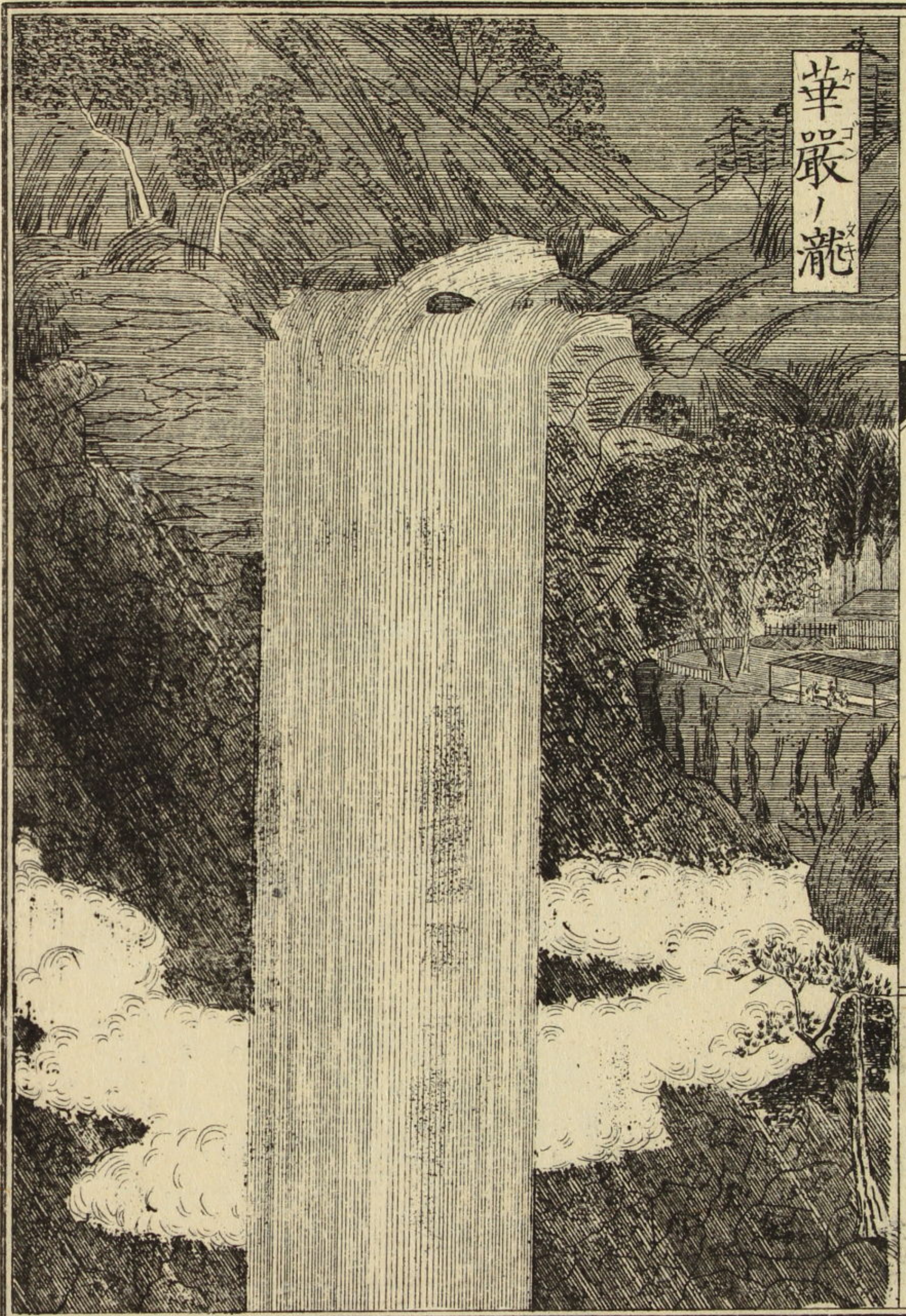
中茶屋 劔峰と大平の中腹にあり此茶屋より先を不動坂と云中宮祠道第一の峻坂あり

大平 不動坂を登りて中宮祠に至るまで平坦の処を云ふ路傍に熊笹のこ多し

華嚴瀧 古へ江尻ノ滝ト云ふたを 此滝の中宮祠の南湖より落來り一條の水路をなまこと五町許に

しと瀧口よ至る其幅或は十間或は六七間湖水の落口は板橋を架す南岸橋と云哥濱への通

華嚴ノ龍



路なり又太平の中程に從是華嚴龍道の石標あり夫より左折して行くと三町許に於て瀑布に至之れ大谷川の水源也其高さ五十五間幅五六間閑東第一の名瀑なり近頃崑上に茶亭を設けて遊覽の便を謀る茶亭の前に小野湖山り長篇の碑あり字々崢嶸惜哉題字を誤る總て此辺の側面より龍の上部を観るのミ因て茶亭の南より左へ小道を凡一町降りて西に向へ龍の全形を望觀まべし其形勢數百仞の絶崑砥の如く中間より鋸齒狀を為以下の灣窟て現ふべからば瀑布の絶崑の中央を飛下し轟々として潭底をうつ實に人目をして凄からしむ蓋し滝の名の縁起より出ると云此谿間に岩燕と云此の數万飛翔して目を遮る其形ち燕に似て大なり

冠木門 中宮祠の入口なり又神門と称す  
 二荒山登拜小屋 元禪頂小屋と云冠木門の内より建連本多の二階造なり惣數廿五棟あり大抵廿間より廿五間に至る左方の二棟之に次で旅舎六七軒接續す其亭席皆湖水を面して風景頗る佳なり右方の永く延て盡る処に賄小屋あり凡十二間四方其脇に徑三尺許の大釜十六を鋸置り此他所々に小屋を建並へ番号を附して區別す因て中宮祠境内此小屋



て埋むと云ふ可あり年々旧七月一日より七日の朝に至るまで日々數千人登山して小屋に  
籠り精進沐浴して後登拜せと云ふ又此辺に牛石と云ふのあり

中宮祠社務所 賄小屋に接す一切の社務を司掌す旧中禪寺別所と云ふの是なり

大鳥居 唐銅製あり湖水の上りあり

鐘樓 大鳥居より石階を登りて左方にあり

拜殿 南に面す前面七門横五門大床舞臺造り

本社 前面三間横二間四辺に瑞籬を廻ら正面及東方に中門を設く

立木觀音堂 殿の西に並ぶ六間四面本尊の勝道上人手刻の千手大士素木の立像よりて其  
丈一丈六尺左右に四天王の像を安す又觀音の詠哥ありとて扁額は題して正面は掲ぐ

中禪ち登りておむこづうみの歌のちるちに立の志らなみ

妙見堂 觀音堂の西南にあり弘法大師滝尾に於て修法の時池中より一大白玉を現出之妙見

尊星なりと後實勅を奉りて茲に祀まるなりと云

唐銅華表 本社の東方二荒山の登り口にあり二荒山神社の題額を掲ぐ

木戸門 唐銅華表の少く奥にあり是の登拜の門あり常に鎖して是より登るを禁ぶ

二荒山 男體山日光山黒髮山と云稱せり其由来此山の東北に當り大坑穴あり羅刹窟と云

毎年春秋兩度必大風を吹起草木を倒し民家を破壊す因て二荒 按さるに二荒は名山の

云意より起るなるへと名つれを弘法大師登山の時之を辟除し二荒を轉じて日光と改む

是より暴風の害を免と云黒髮山の稱の歌書を見えて最も古く又男體山の名に因り大

真子小真子太郎嶽等の稱呼も生せしならん登路の木戸門より凡三里許にして頂上の社壇

に達す然れども半腹以上の峻峻に路の尋ね難き處あり社壇より東方二町の処に平坦

なり茲に對面石と云あり勝道上人の神影を拜せり石なりと云夫より六七間登るに此山

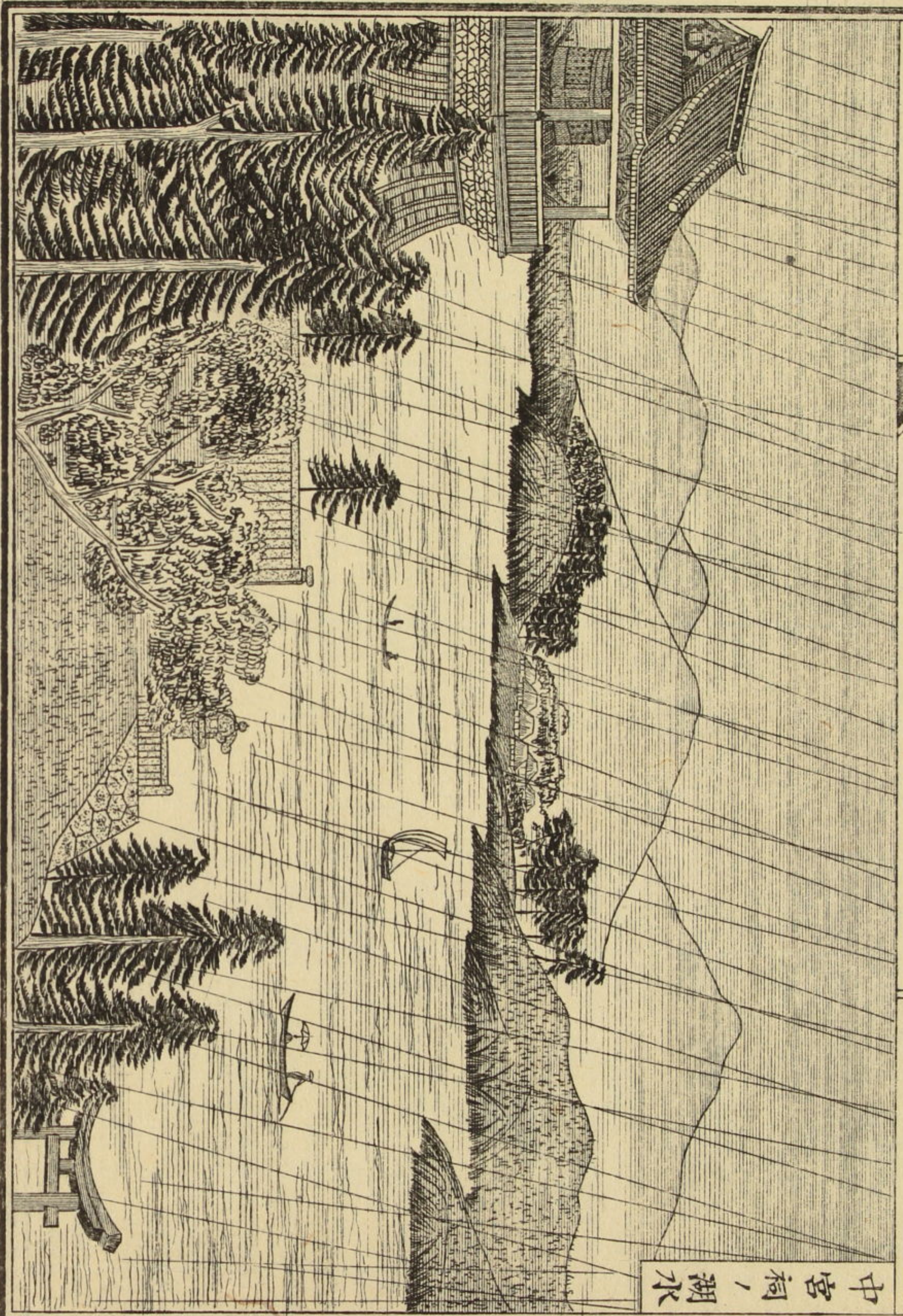
の最極方り又社壇より西方三町許の処に太郎の神社あり總て此頂上より望め富岳南方

に峙ち赤城筑波其他の諸山の眼下に屹立し山間の湖沼の恰も盆の如く而して満山老樹鬱

生し四時榮枯の變あることかく石楠花の周圍二三尺あるもの躑躅の拱抱まべきりの各林

を赤す其神秀あるに至りての言語の能く尽す処にあらざるなり古歌にうをむの黒髮山を

乃越て木の下をぬれまけるの事



中宮祠、湖氷

幸湖 世俗中禪寺の湖水と唱ふ古来南湖とのみ稱して名のあがりりを主上御巡幸の際神宮

より宮内省へ上言して幸の湖と云ふ名を丁賜せられたりといふ山中第一の大湖あり東西

三里南北一里余此水清冷なるにより魚蟲を生ぜばと云傳へしが近頃鯉魚を放てより追

々繁殖の兆を見る又湖辺樹木の茂生するも終に塵芥木葉の浮遊をるを見ゆ

南岸橋 湖水の落口は架さる木橋なり長さ十間許哥ヶ濱古峯原への通路あり

歌ヶ濱 湖水の東岸なり勝道上人汀濱して修法せる時天人降りて詠歌讚歎せるに因り名づく

寺ヶ崎 歌ヶ濱より西南にあり慈覺大師一字を創立し手刻の本尊を安置し堂の中央に藥壺

を埋め藥師寺と号す位置は南岸より七八町水中へ斗出さる丘にあるを以て寺崎藥師と稱

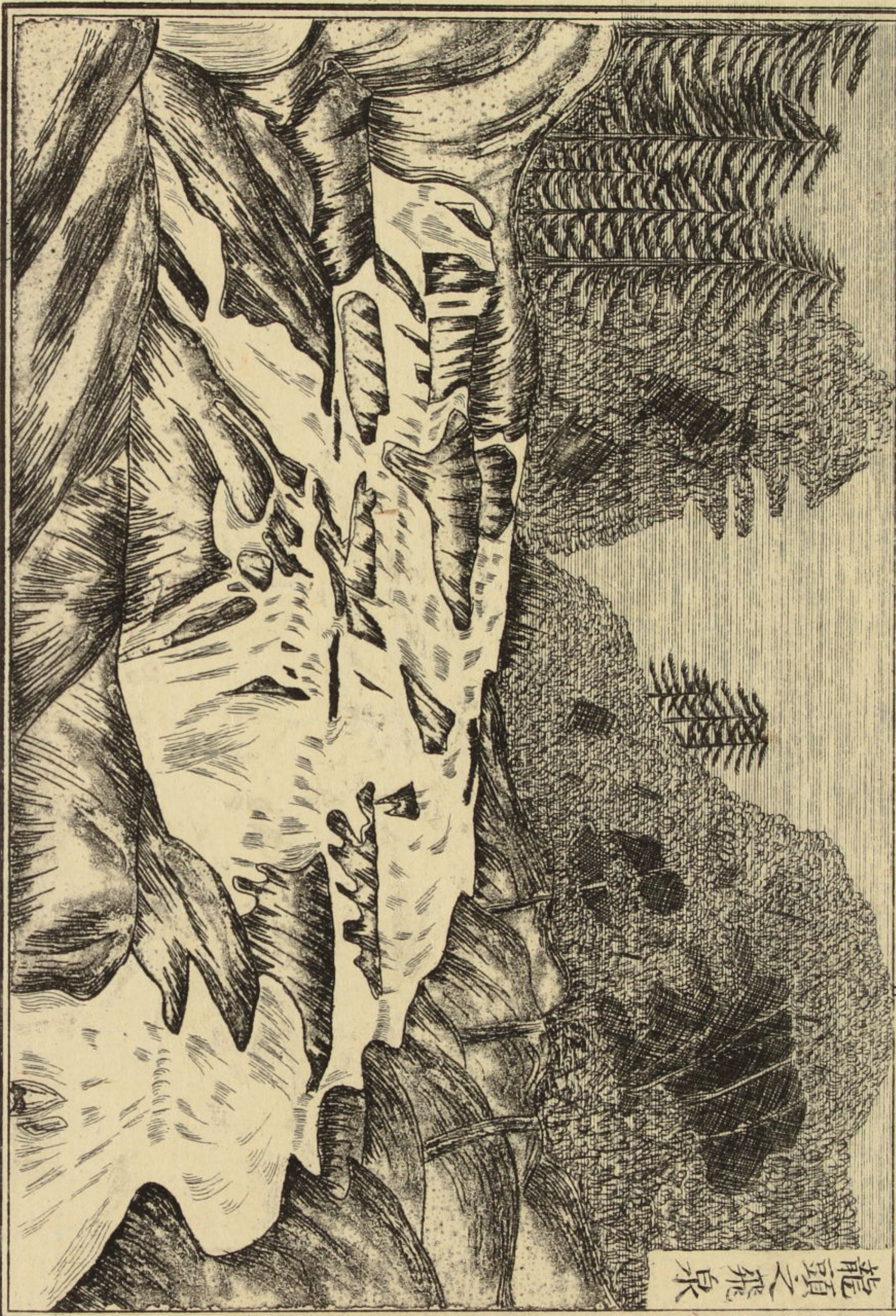
す

上野島 此島湖水の北辺より望めば湖心は浮ぶが如し嶋中奇石珍木頗る多し

千手崎 中宮祠より西に當る湖岸なり千手院と云ふ堂宇あり

地獄茶屋 中宮祠より湖水に沿ひ行くと一里余往來橋を渡りて右方にあり此茶屋の東男休

山の麓に洞穴あり土人呼で地獄穴と云其近傍なるり故に名づく湯元へ行もの休憩所あり



龍頭之飛泉

龍頭瀧 湯瀧の下流なり路傍より望めば其飛流をる形勢自ら龍頭の如し故に名づく又紅葉

の勝景あるを以て紅葉の滝とも唱ふ

標茅原 赤沼原戰場原とも唱ふ然まども別に其地あるにあらば中宮祠より湯元まで三里間

平原の總称なり赤沼原と称するは原中に靈沼あり常に清水涌出する閑祖上人閑伽の水を汲

ることあるに因り閑伽沼と名づけしと又赤沼と書まるは上古二荒の神上野國赤城の神と

湖沼を争て戦争ありし時血流れて湖沼為に赤し故に赤沼又ハ戰場原とも唱ふると云標茅

原或ハ忠女治原と凡書せり新古今集よ

わたの免志めぢり原のさしもくさ我世の才よあらんかぎりぞ

湯瀧 此瀧ハ湯湖より落来り斜面の岩石上を奔流をること凡半町余其形勢ハ滝口五六間漸

々廣長して八九間に至る其水岩石に觸れて勢怒濤の如く白泡四方に飛散す其奇絶名状す

べからざるなり古来昇山の瀑布を称するもの獨華巖を推て此滝ハ及ぶさいるハ何を

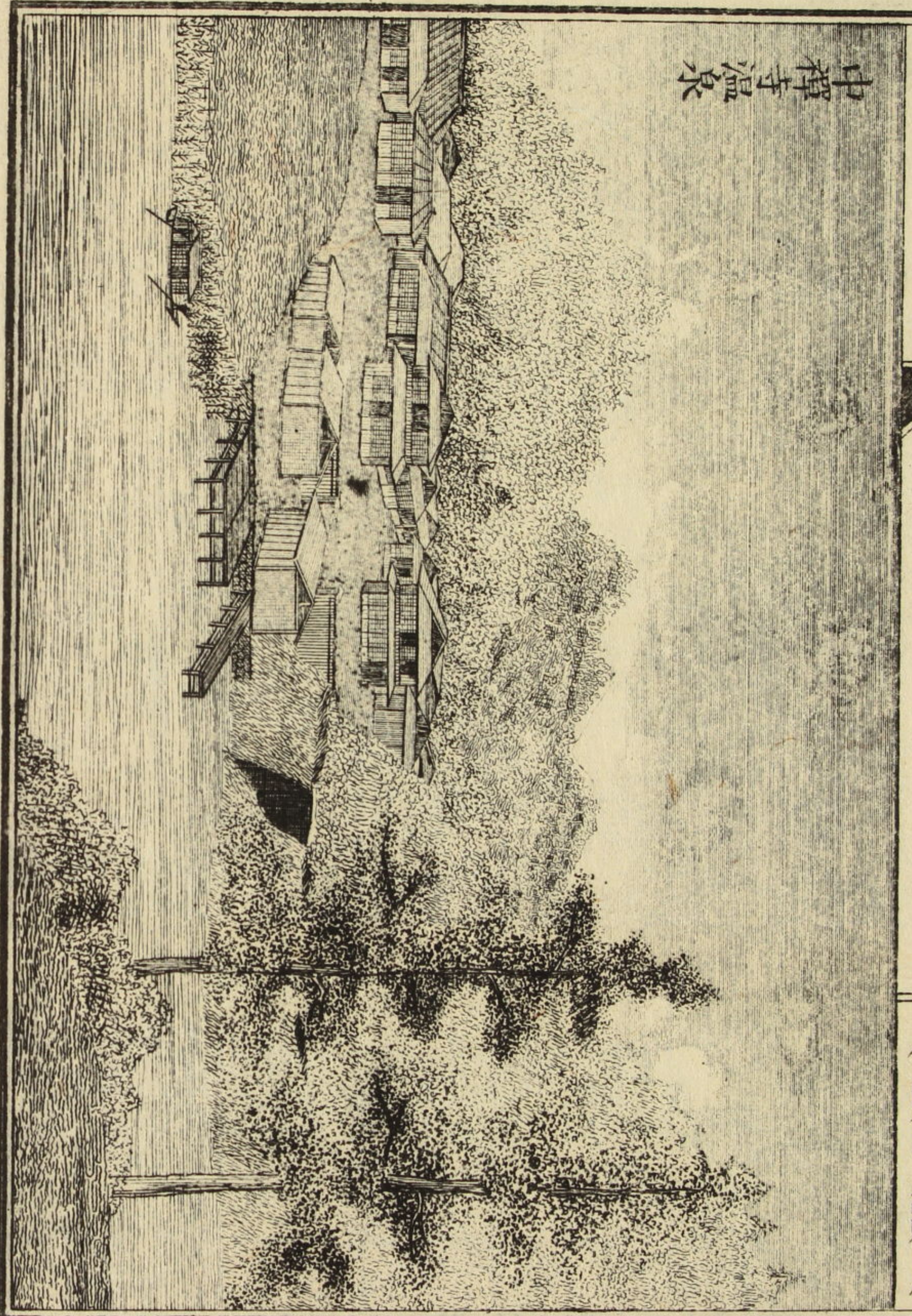
や當時伯樂の經過もるなきハ韻士の高評を待つ

湯湖 湯元にあり廣袤凡十七八町此湖往時ハ魚類を見ざりしが近來鯉魚を放ちしより追々



繁殖して數方頭に至る湯守をる者之を漁して浴客に饗す山上鮮魚を得るも亦開明の致す所の

湯元 世俗中禪寺温泉と称す中宮祠より直西に當り行程三里即ち神橋より六里と云ふ此温泉開闢の年代今得て知るべからば相傳ふ家屋の体裁を為し、地形の西北より東に亘りて山を遶り、東より南に湖水と共に開けたり湯守は日光市中の居民にして十軒あり各支店を設く冬春の際に雪深く寒威烈しきにより旧曆四月八日初て浴室を開き九月八日を期と十浴室を閉ちて山麓に下る近來浴場の盛ちるに隨ひ營繕建築日に加はり二層或は三層の高樓を構へ各大屋支店等の別ありて數區に分ち以て客室を設く湯槽は浴室の各所に散在し其數十二入口に男湯女湯の標札を掲げ區別正しく且清潔なり又山麓は温泉社あり湖辺に兎島望湖亭あり遊客舟を浮へて勝景を釣る殆ど仙境の街區なり是より西南を望めば前白根奥白根の高峯屹立して盛夏猶白雪の皚々たるを見る



日光名産

鳥類

○慈悲心鳥 ○駒鳥 ○岩燕 ○鶉

獸類

○熊 ○羚羊 ○猪 ○鹿 ○猿

魚類

○鱒 ○山鮎魚 ○岩魚

木類

○椰躑躅 ○眞弓 ○瀬木 ○石楠花 ○槐 ○梅 ○櫟 ○峯張 ○川胡桃 ○蔦

艸類

○日光蘭 ○白根蘭 ○白根葵 ○夜叉柄抄 ○苔桃

食類

○岩茸 ○獅子茸 ○椎茸 ○松茸 ○マイ茸 ○粟子 ○辛皮 ○胡鬼子 ○葱 ○大谷海苔 ○紫蘇卷

蕃椒○湯婆○煉羊羹

製造物

○春慶塗○諸漆器○指物類○曲物類○挽物類○栗山抄子○木鉢○曲桶○石楠花物指

此外礦物藥品等ハ畧す

神橋より各所への里程

- 東照宮七町○二荒山神社九町○靈屋十町○瀧尾社十八町○霧降瀧半里○含満十三町○寂光一里○裏見瀧余一里○清滝一里十町○馬返一里三町○中宮祠旧中禪寺三町○湯元六里○細尾村二里○足尾六里○古峯原六里十町○今市二里○宇都宮九里○鹿沼七里○朽木十三里○東京三十六里○大田原十三里○信州善光寺五十四里

明治二十年六月十五日出版御届

同 九月 出版

宮城縣平民

編輯人 錦 石 焯

磐城國伊具郡角田東町三百廿六番地

栃木縣平民

出版人 鬼 平 金 四 郎

下野國上都賀郡日光鉢石三百五十三番地

東京銅鑄工 細井松夫門人合刺

38-801

